魔法少女リリカルなのは　　夢甦る銀槍

ルオト

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
魔法少女リリカルなのは　夢甦る銀槍

【Ｎコード】
Ｎ７８９１Ｕ

【作者名】
ルオト

【あらすじ】
少女は自らの夢を親友に託し死んだ。だが運命の悪戯か、少女は二度目の生を受ける。だがそこは少女が生きていた世界ではなく、似ているが全く異なる世界だった。
そこで少女は自分とどこか似た境遇の少女と出会い、家族となる。
本来出会うことの無い少女達との出会いが、少女の夢を変える。

第一話　目覚めと出会い

そこは深い闇の中だった。少女はその暗闇の中に漂っていた。そこでは時間などあってないようなものだった。少女にとってもそうだった。ここにいつからいるのかも覚えていない。

「？」

その闇の中で少女は二つの光を見つけた。銀色に光る懐かしい光と青いやさしい光。

少女はその光に手を伸ばした。その行為には理由がなかった。直感なのだろう。少女は手を伸ばし、光に手を触れた。瞬間、声が聞こえた。

『あなたの願いは？』

「私は・・・・・生きたい」

少女はかつて自分が願った夢を躊躇わず答えると、銀色の光は一匹のモルフォチョウへと変化し、青い光を浴び一本の銀色のロッドへと変化した。

そして青い光は輝きを増し、少女とロッドを闇の外へと救い上げた。

青い光に照らされる中、少女に耳に懐かしい声が聞こえた。

『また明日ね』

「？？・・・・・あ、亜梨子！」

少女は声の主、親友の名をとっさに口にしたが、少女の意識はそこで途切れた。

「ん。ここは？」
少女は目を覚ますとそこは見知らぬ部屋のベットの上だった。そこは自分が入院していた病室でもなく。一度だけ見たことのある親友の部屋でもない。もちろん実家にある自分の部屋でもない。
妙に部屋に物が無いが、掃除自体はしっかりされている。
なぜ自分がこんな所のベットに寝ているのかまるで見当がつかない。
そもそも自分は・・・・・・・・・・
「？・・・・・わたし、生きてるの？」
自分で自分の口にした言葉が信じられない。そう自分は確かに死んだ。しかも二度死んでいる。
一度は肉体的な死。そして二度目は親友に自分の夢を託して死んだ。間違いない。確かにあの流星群の夜に自分は親友に自分の夢を託し、大切な親友を自分によく似た、自分より少しやさしく頼りになるあの少年に託し逝ったのだ。
なのに自分はまだ生きている。
少女は恐る恐る自分の頬に手を当てる。
確かな感触。これが夢や幻ならとてもリアルで残酷な設定だ。
少女は慌てて自分の姿を確認しようと周囲を見渡す。ちょうど窓ガラス
にぼんやりと映る自分の顔。それを見て少女はさらに驚愕を浮かべた。
そこに映っていたのは生前の自分の顔。もういないはずの人間の顔だった。
「一体、何が起きたの」
少女が困惑していると部屋の扉が開かれ、入って来たのは車椅子に乗る九歳くらいの少女だった。

「お、やっと気がついた。家の前で倒れてるの見つけた時は、ほんまビックリしたわ」
車椅子の少女はそう言いながら、少女に近づく。少女は車椅子の少女の雰囲気が誰かに似ているような気がして、少しだけ考え、すぐに答えが判ると、自然と笑みがこぼれた。
車椅子の少女の雰囲気が親友の亜梨子にどこか似ている。
「お、少しは元気が出たみたいやな。ほな、自己紹介や。私は八神はやて」
「・・・・・摩理。花城　摩理」

親友に夢を託し、死んだハンターと闇の運命を刻まれた魔道書の主となる少女。
本来出会う事の無いはず二人の出会いが、一体どのような結末をもたらすのかは、この時点では誰も知らない。

第一話　目覚めと出会い（後書き）

思いつきで新小説始めてしまいました。正直自分でも小説二本はキツイと思いますが、頑張って更新していきたいと思います。

第二話　新しい世界　新しい家族

摩理は混乱していた。死んだはずの自分が生きている事は勿論、今の状況にも困惑していた。
車椅子の少女、はやての話によれば摩理は家の庭に倒れており、はやてが慌てて救急車を呼ぼうとしたのを止めたのも摩理自身だと語った。

「いやあ、私もホント驚いたわ。朝起きて洗濯干そう思ったら、庭に人が倒れてるとは思わなかった。しかも同い年くらいの綺麗な子やから、さらに驚きが倍や」
綺麗と言われ摩理は少しだけ頬を赤く染めたが、はやての言葉に聞き逃す事の出来ない一言に眉をひそめた。
「同い年？」
「へ？もしかして年上？私はてっきり、同い年かと思ったんやけど・・・・」
そう言われ摩理は改めて自分の体を見た。自分の記憶よりはるかに小柄な体。確かにはやてと同い年くらい、九歳前後の体だ。
（・・・・・どういう事？生きているだけじゃない。体も縮んでいる。それに体の調子も良い。まるで亜梨子になった時のような体の軽さ。まさか病気まで治っているの！？）
自分の状況に、困惑を超えた理解不能の状況に摩理は混乱しそうになったが、自分にとってもう一つ確認すべき重大な事柄が在る事を思い出し周囲を見渡す。
はやては不思議そうに首をかしげるが、今はそんな事はどうでもいい。
周囲にはいない、なら部屋の外かもしれない。
「・・・・・その、聞いてもいい？私が倒れていた周囲に蝶が飛んでいなかった？銀色の蝶」

「？そないな綺麗な蝶がいたら、絶対捕まえるわ」
はやての言葉に摩理は納得した。いや本当ははやてに尋ねる必要もなかった。
かつて摩理の周囲には必ずあのモルフォチョウいた。あれがいなくなる事などある筈が無い事を摩理はよく知っている。
「あ、でもこれが落ちてたな。この銀色で綺麗な模様の彫ってあるロッドと銀色の鎖に金色のリングがついたオシャレなネックレス」
はやてが差し出した物を見て摩理はこの日、最大の驚きを覚えた。
「そ、それ。？先生？にあげたはずの！それにそのロッドは！亜梨子の・・・・・」
二つとも摩理の持ち物ではないが、摩理にとって大切な人が持っているはずの物だ。
はやてが差し出した二つを受け取ると、摩理の瞳に自然と涙がこぼれた。
摩理は理解した。ここに二人はいない。だがなんとなく大好きな親友と？先生？が摩理にここで生きろ。夢を叶えろと言っているような気がした。
そして摩理が寂しがらないように、二人がプレゼントしてくれたような気がした。

目の前で泣く摩理を見ながら、はやてはこの少女が何故か他人に思えないような気がした。
そもそも見ず知らずの他人を、家にあげ看病する事がどれだけ危険な事かもはやては理解していた。
だがはやてが摩理を見たとき、何故か自分を鏡で見たような感覚に捕らわれた。
実際助け、今泣く摩理を見て、その感覚は間違いではないと改めて確信した。

「泣いたら、ええ。今は私達だけや。我慢しなくてええよ」
今も涙をこぼしながらも、必死で気持ちを押し込もうとする摩理をはやてはそっと抱きしめた。
摩理は一瞬だけ驚いたが、すぐにはやてに身を任せはばかる事無く大声で泣き出した。
そんな摩理を見ながらはやては決めた。この子を絶対一人にしないと。

「・・・・・・ごめんなさい。いきなりあんな大声で泣き出して」
「ええよ。人それぞれ事情もあるやろうし。それよりこれからどうするの？帰る家あるの？」
はやての何げない、だが重要な質問に摩理は視線を下げる。
「・・・・・・・・・残念だけど、私には帰る場所は無いわ」
摩理がどこか自嘲気味に答えると、はやては少しだけ考えるそぶりを見せ、大きく頷くととんでもない事を口にした。
「おっしゃ。なら今日から私の家族になればええ。幸い私は一人暮らしや。誰も文句言わへん」
「・・・・・・・・・・・・・・・・・・え？」
はやての提案は摩理にとって予想のはるか斜め上だった。
（家族？私とこの子が？なんで、いきなり。それにこんな家に一人暮らし・・・・・・・あ！）
はやての提案に驚いた摩理だが、その可能性に気付くと、摩理は何故はやてがこんな提案をしたのか理解できた。
（そっか。この子も同じなんだ。私と同じ独りの孤独に耐えていた。ならそうだよね。亜梨子が私にしてくれたように、この子と・・・・・・）
「そうと決まれば、まずはご飯や！腹が減っては戦はできん言うし、ちょっと待ててや。今美味しいもんを」

「摩理」
「え？」
「摩理って呼んで。今日から家族になるんでしょ？だから呼び捨てにして」
摩理の言葉にはやては一瞬驚いたが、すぐに満面の笑みを浮かべ。
「なら、私の事もはやてって呼んで。もちろん呼び捨てや」
「うん」
摩理も最高の笑顔を浮かべはやてを見送った。

「ごちそうさま。はやては料理がうまいのね」
「あははは。そんな褒めてもらうと照れるわ。で、摩理の体の調子はどうや？痛いとことかあるんか？」
「・・・・・・・ないわ。多分、日常生活は問題ないと思う」
摩理自身どこか困惑気味に自分の状態を口にする。
その様子にはやては首をかしげる。
「ところで話は変わるけど、はやて。？虫？って知ってる？」
「虫？それって庭とかにいるアリとか、いも虫とかの事？そんなん子供でも知っとるよ」
摩理の質問の意図が判らないはやては、ごく自然とそう口にしたが、摩理は難しい表情を浮かべた。
「噂話でもいいわ。人の夢を食べる？虫？　聞いた事ある？」
「いや、ないわ。そんな虫の話、聞いた事無い」
「そう。ありがとう」
摩理は安堵したような、少しだけ寂びそうな表情を浮かべるが、はやては摩理の質問の意味がまるで理解できなかった。

（・・・・・・・ここには？虫？はいない。ならはやての平穏を邪魔する存在はいなさそうね）

摩理は内心でそう結論する。だが摩理は知らない。この世界に？虫？は存在しないが、代わりに魔法が存在する事を。

そしてこれから二人は魔法にかかわる事を・・・・・・・

第三話　摩理とはやての生活と起動する闇の書

摩理がはやて共に暮らすようになって、ひと月が過ぎた。
いきなり家族として生活するようになった二人だったが、最初はどこかぎこちなかったが、一ヶ月間生活を共にするうちに今はそのぎこちなさも無い。

「ほな摩理。お味噌汁テーブルに運んで」
「ええ。わかったわ。はやて」
はやてが台所で朝食の最後の準備をしている中、摩理は出来た料理をテーブルに運ぶ。そんな光景も今は当たり前となった。
（それにしても、はやては凄いわ。料理もそうだけど、たった一人でこの家で暮らすなんて）
家族になったその日にはやての料理の腕前や、足が不自由にもかかわらず、出来る事は自分でやろうとする、はやての姿勢に摩理は何度も驚かされた。
足の悪いはやての手伝いに何度か家事の手伝いをした摩理だったが、摩理は生まれてから家事といえる事をした事が無く、はやてにはかなり迷惑をかけたが、生来の勘の良さもあってか、今ではそれなりにははやての手伝いをできるようになった。
最も料理はまだまだはやての域には遠く、今も修業中のみだ。

「いただきます」
「いただきます」
二人は仲良く朝食を始めた。
「まだまだ、私ははやての料理を超えられなさそうだわ」
「そら当たり前や。むしろそう簡単に向かれてたるか。まだまだ摩

理のお師匠様気取りたいしな」
「ふふ。なら今晩もご教授お願いします」
「まかしとき！」
こんな会話も今は当たり前になった。
「そう言えばはやて。午後から病院よね？」
「うん。そうや」
味噌汁を口にしながら、はやては何気ない口調で答えた。
「なら、それまでは時間もあるのね。なら昨日の続きをしましょ」
摩理の提案にはやての動きは静止した。
「……あ、えっと摩理？昨日の続きって、勉強のか？」
「そうよ。何か問題でもあるの？」
摩理が不思議そうに尋ねると、はやてはどこか言いにくそうにしていたが、意を決して口を開いた。
「そら勉強も大事や、私は平均くらいには勉強できるから、別にそんな慌てて勉強せんでも」
「そう？なら、これからどうする？」
「う～ん。そや摩理。一緒に図書館にいこ。借りたい本もあるし」
「ええ。いいわよ」
摩理は笑顔でうなずいた。

（ふ～危なかったな）
摩理に気付かれないように、はやては内心安堵の声を漏らした。
別にはやても勉強は好きでも無く嫌いでも無い。だからそこそこ程度の実力をキープできる程度の学力を身につける程度に勉強していたが、その自信は摩理によってあっさり崩された。
摩理がどの程度勉強ができるのかと、面白半分に一緒に勉強しようと言ったのが間違いだった。
摩理は小学三年生どころか、中学レベルの学力がある事をはやて

は知ったのだ。しかも異様に教え慣れている。算数で分からないところを摩理は優しく教えてくれた。
そこまでならはやても特に気にしなかった。
摩理は気付いていないが、どうにもはやてに何かを教えるという行為その物を気に入ったらしく、摩理はいつの間にかはやての家庭教師的な存在となっていた。
しかもはやて用に問題集などを作る徹底さ。おかげではやての勉強ペースは以前の二倍以上に早くなり、もうすでに小学三年生の範囲を終えようとしていた。
これ以上ペースを上げられたら、来年には中学レベルの勉強をさせられるかもしれない。
それはそれで構わないのだが、何となくはやてはそれが嫌で今回は勉強を断ったのだ。
「そうや。摩理の夏服、買わなあかんな。病院の帰りにデパート寄ろうか」
「そうね。でも、明日ははやての誕生日でしょ？今日は明日の為に、パーティーの買い出しをした方がいいんじゃないかしら？」
「なら両方や！そうなると、病院の帰りは大荷物になるかもな」
「そのあたりは上手く加減しましょう。ならはやて洗い物は私がやるから、先に出かける準備を始めた方がいいわ」
「そやな。なら先、準備始めるわ」
そう言うと、はやては車椅子を操作し、自分の部屋へと向かった。

摩理は洗い物を手慣れた手つきで終えると、自分の部屋〈毎日はやてと一緒に寝る為、ほぼ私物を置くために使ってる部屋〉へと向かった。
簡単な着替えを済ませ、？先生？に送ったペンダントを身につけ、銀色のロッドを手に取る。

「……アリスも一緒に行く？」
『イエス、マスター摩理』
ロッドの言葉に摩理は笑みを浮かべた。
摩理の持つロッド。これに意思がある事に気付いたのは、はやてと出会ったその日の深夜だった。
ロッドがいきなり話しかけてきた時は、さすがの摩理も悲鳴をあげそうになった。
ロッドが自らの名をアリスと名乗った時は驚いたし、口調が全然違うから最初は気付かなかったが、声も亜梨子と同じ声だということにも驚いた。
そしてアリスの説明によると、摩理はもう虫憑きでは無いが、アリスを使う事によって虫憑きの能力を使う事が出来ると言われた。しかも消耗するのは？夢？では無く、魔力だと言われた。
半信半疑だった摩理だが、アリスを使い同化してみると、それは？虫？と同化するのと同じだった。
しかも魔力の消耗は？夢？を消耗するよりははるかに楽で、効率的な事もわかったし、訓練しだいで他にも「魔法」を習得可能だと言われた。
しかし摩理は魔法の習得をせず、はやてとの暮らしを優先することにした。
アリスについても必要以上に使わない事を決め、アリスにもその事を話した。
機会が来たら、はやてにもアリスの事を紹介しようと摩理は決めていた。
今の摩理にとってアリスは武器では無く、はやてと同じくらい大事な友人となっていた。
「今日は、図書館と病院。それと買い物よ。アリスにはつまらないかもしれないわよ？」
『問題ありません。それはそうと、明日ははやてさんの誕生日ですね』

「ええ、そうよ。それがどうかしたの？」
『でしたらサプライズで、私を紹介しては？』
アリスの提案に摩理は微笑を浮かべた。
「ふふふ。アリスは悪戯好きね。そうね。そうしましょう」
摩理はそう言うと、アリスを専用のケースに仕舞い、待っているだろうはやての下に向かった。

その夜、はやても摩理も明日のプランを話しあっていた。はやては久しぶりの一人では無い誕生日に心躍らせ、摩理も初めての友達の誕生会に心を躍らせていた。
はた目から見たら、どちらの誕生日か分からなくなるほどの、はしゃぎぶりだ。
「あ、もうこんな時間や。そろそろ寝ないと明日になってしまうなー」
「そうね。明日起きたらまず初めに、『お誕生日おめでとう』って言いたいしね」
そう言うと二人は布団にもぐりこんだが、どちらもまだ眠ってはいない。
そしてちょうど日付が変わった瞬間、はやての部屋に異変が起きた。
「なんやこれ！」
はやての部屋の雰囲気が激変し、はやての部屋に置いてあった鎖で封じられた十字の紋章のある本が中に浮遊している。
しかも床には魔法陣が浮かんでいた。
摩理は瞬時にはやてをかばうような態勢になると、目の前の本を睨みつける。
（失敗したわ。アリスは私の部屋。もしこの本が危険な物なら拙いわ）

摩理は己の失敗に後悔したが、すぐにその事を思考から取り除いた。すでにその表情は戦闘態勢。多くの虫憑きを欠落者へと変えた冷酷なハンターの顔になっていた。
だが事態は摩理の予想を超えていた。
はやての胸から白い光が吸い出された。
（これは……魔力？）
白い光が魔力だと気付いた摩理はとっさに、はやての魔力をはやてに戻そうとしたが、一瞬遅かった。
本が光を放ち、部屋の視界が無くなった。
摩理はとっさに目を隠し光が収まるのを待った。そしてそこには……
「「え？」」
はやて、摩理は同時に驚きの声を上げた。
「闇の書の起動を確認しました」
「我ら、闇の書の蒐集を行い、主を守る守護騎士にございます」
「夜天の主の下に集いし雲」
「ヴォルケンリッター、何なりと命令を」
恭しく膝を折り、主の言葉を待つ四人の騎士がそこにいた。

第三話　摩理とはやての生活と起動する闇の書（後書き）

摩理の家事スキルが分からず、こうなりました。
後、摩理の口調ですが、はやての影響で少し砕けたという設定です。
さて次の話は、守護騎士とはやて、摩理との出会いです。

第四話　守護騎士と主

ヴォルケンリッターの将シグナムは主とともにいる少女に、疑念と興味がわいた。
見れば主と年は変わらないが、その視線には怯えや恐怖、戸惑いさえ無い。あるのはただ鋭い槍のような視線。
その視線をシグナムは知っていた。敵を前にした戦士の視線その物だ。
そんな視線を自分に向ける事が出来る、この少女は何者なのか？
そしてその視線に見合うだけの実力を持っているのか？

摩理は視線で牽制をしているが、内心では焦っていた。摩理の手元にはアリスが無い。
そんな状況で四対一。しかもはやてを守りながら。ここまで不利な状況での戦闘は虫憑きだった時にも経験した事が無い。そこまで考えて、自虐的な考えが浮かび苦笑した。
（ふふ。違うわね。あの頃の私には守るモノが無かった。ただ自分の為に戦って殺してきた。そんな私が不利な戦闘をするはずが無いわね）
戦って不利な戦況になることは何度もあったが、戦う前から不利な状況は初めてだ。
昔の摩理なら何を犠牲にしようと撤退しただろうが、今はただ自分一人が助かるだけでは駄目だ。はやてと共に撤退それ以外の選択肢はない。
（とは言えどうしたものかしら。この四人虫憑きのレベルで言えば確実に号指定。しかもかなり高い号指定されるでしょうね。大体二、三号指定は確実ね）

摩理が相手の戦力分析、および打開策を考えているさなか、背後から待ったの声が掛けられた。
「ちょい待ち！そっちの四人も摩理もおちつこ。そーや下のリビングでお茶でも飲みながらそこでゆっくり話そう」
現状に耐え切れなくなったのか、それとも本気で状況改善の為か。はやてはそう提案してきた。
ヴォルケンリッターを名乗る四人は一瞬驚いたが、はやての言葉に従うようだ。
摩理としてもこの場での戦闘は不利要素が多すぎる為、はやての提案に従った。
もちろん移動の際にアリスをこっそり回収し、リビングで戦闘になった際には即行動できる準備だけは整えた。

「ほな。まずは自己紹介からや。私はこの家の家主八神はやて。そんでこっちが、家族の花城摩理」
同世代の少女しかも名字も違う少女を家族というはやてに四人は何もリアクション無く、自らの自己紹介を始めた。
「私はヴォルケンリッターの将、剣の騎士シグナムです」
「ヴォルケンリッター参謀、湖の騎士シャマルといいます」
「ヴォルケンリッター鉄槌の騎士ヴィータ」
「ヴォルケンリッター盾の守護獣ザフィーラだ」
四人の自己紹介にはやてはフムフムと頷く。どうやら友好的にいくようだが、摩理は全く別の考えを浮かべていた。
（そうね。彼らが名乗った通りなら、あの参謀を名乗る金髪の女性から潰すべきね。次があの赤毛の子供ね。感情の制御が未熟ね。仲間を潰されたら激昂して我を見失うタイプね。残り二人犬耳の男とピンクの髪の女性。どちらも潰し難そうだけど、二対一程度ならどうとでも出来そうね）

すでにヴォルケンリッターとの戦闘予測を立てていた。
「で、自己紹介が終わったところで、私がその、闇の書やったけ？それの主になったって事詳しく聞かせてくれんか？」
はやての問いに答えたのは、参謀を名乗るシャマルという女性だった。

闇の書……魔道士の力の源リンカーコアを蒐集しページを増やし、６６６頁集めると、主に大いなる力を与える。
「そして、主を守護し、主の為にページを集める役目を持つのが我らヴォルケンリッターとなります」
その説明にはやては考え込み、摩理は呆れた。
（少なくともはやてには無用の長物ね。そんな物騒な物の主なんてはやてが望むはず無いわ）
摩理はそう結論づけると、いよいよこの場が戦場になる最悪の事態を想定した。
「うん、わかった。つまりや、守護騎士みんなの衣食住。主の私がきっちり面倒見なあかんって事や」
「「「「「はっ？」」」」」
守護騎士と摩理は同時に驚きの声を上げた。
「え、あの、主、その蒐集は？」
「私は大きな力なんていらへん！せやから守護騎士のみんなはこれから家族として一緒に暮すんや！」
はやての宣言に守護騎士の面々はどこか戸惑った表情を浮かべたが、摩理は逆に微笑を浮かべた。
「そうね。家主のはやてがそう言うならもう決定ね。あなた達、仮にも騎士を名乗るのなら主の決定には逆らえないでしょ？」
「う、うるせい！主でも無いお前に言われる筋合いは」
赤毛の少女ヴィータが噛みつくように摩理を睨むが、摩理は意に介さなかった。

「ふふ。まあいきなり言われてもすぐに納得できないでしょうから、今日はこの程度にして、また明日にしましょ。はやてもそれでいいわよね」
摩理の提案によりこの場はそれでお開きとなった。

守護騎士が現れて、一週間が過ぎた。当初は摩理の時以上に困惑する守護騎士だったが、はやてのもたらす平穏に今ではすっかり慣れたものだ。
また摩理がアリスを皆に紹介した時は守護騎士には警戒され、はやてには「なんでもっと早く紹介せんかった」と怒られたる騒動もあったが、はやてはすぐに怒りを納め、守護騎士たちにも念話のような初歩的な魔法を摩理が習得していないことから警戒を解かれた。
その後も様々な騒動や、トラブル。日常的な平穏があった。
はやては勿論、守護騎士もこの平穏を満喫していた。そして摩理も。
だが摩理はかすかに不安があった。
死んだはずの自分がここにいる理由。？虫？の存在しない世界。イレギュラーであるモルフォチョウの能力を持つデバイス・アリス。
そして魔法と闇の書。
もしかしたら？花城摩理？という存在はこの世界でも決定的なバグを起こす存在なのかもしれないという不安を、摩理は感じていた。
だが摩理はこの幸せを手放したくなかった。二人目の親友を。血は繋がらないが温かな家族を。存在するはずの無い自分の名を呼んでくれるこの世界を。
だから摩理は決意していた。この平穏を脅かす存在が現れたなら、迷わず滅ぼす事を。

第五話　守護騎士とハンター　前編

守護騎士が現れてから、数か月がたった。その数カ月は多分、八神はやてにとって、これまでの人生で一番幸福な時間となっていた。
そしてその時間は守護騎士にとってもそうかもしれない。戦いの無い、ただ平穏な時間。それは守護騎士が初めて経験する穏やかな時間であるのは間違いない。
そして花城摩理にもこの時間は幸福だった。
かつて孤独を癒してくれたたった一人の親友、亜梨子と共に過ごした時間と、同じ穏やかな時となっていた。
この時間は皆が望む幸福となっていた。ある日、はやての担当の医石田から、はやての病状を聞かされるまでは……

その日、はやての定期検診の結果が知らされた。八神家一同に検診結果は今まで通りと報告されたが、何故かシグナムとシャマルのみその場に残される事となった。
その光景に摩理は凄く嫌な予感がした。
そして摩理の予感は確信へと変わった。その日の夕食、普段通りの穏やかな時間だが、守護騎士の面々は普段通りなのだがどこか違って摩理には見えた。
はやては気付いていないが摩理には気付けた。シグナム達の雰囲気が摩理の症状を隠す医師達のそれに酷似していたからだ。
その夜、はやてが眠ると、ヴィータははやてと摩理を起こさぬようにベットから抜け出した。
眠ったふりをしていた摩理は、ヴィータが抜け出すと音をたてないように起き上がり、周囲の様子をうかがった。
どうやら守護騎士四人で出かけるようだ。

（……どうやら事情を知らないのは、はやてと私で確定ね。何をするつもりか知らないけど、間違いなく大変な事が起きているみたいね）

摩理はそう結論すると、部屋に戻り簡単な着替えとアリスを手にし、シグナム達の後を追う事にした。

庭に出た摩理はアリスを起動させる。ロッドは銀色に輝く彫刻の様な槍へと変化する。

変化した槍から触手が伸び、摩理に突き刺さる。突き刺さった触手は銀色の模様となり、摩理の右腕と左足に浮かび上がる。

かつて虫憑きだった頃と同じ模様、同じように湧きあがる力。そしてモルフォチョウが備えた？不死？さえも殺し、？始まりの三匹？をも殺しうる、世界に生れるはずの無いバグたる力をアリスと同化した事によって再び手にした摩理。

摩理は数回ほどアリスを振るうと、自身の状態の簡単な確認を終えた。

「この程度で十分ね」

摩理はそう言うと、跳躍し、向かいの家の屋根に着地する。

アリスをかざし集中する。この数カ月簡単な魔法をシャマルに教えてもらっていた。その中に探査魔法というものがある。それと、アリス自身の探査能力を合わせる事によって、今の摩理では本来探査できない範囲まで相手の気配を探す事が出来る。

数秒後、摩理の感覚に馴染みある四つの魔力の気配と、全く違う二つの魔力の気配を感知した。

その二つは明らかに関係無いので、四つの魔力の気配の元へ向かう摩理。

摩理は久しぶりの同化に体を馴らすように、徐々にペースを上げる。その動きは人間の運動神経をはるかに超えた動きだった。

もっともこれでも完全に同化させているわけではなかった。摩理はあえて不十分な同化にとどめた。

理由はかつて？先生？に「摩理の力はバグだ。使えば世界を変え

る。そしてその変化を元に戻そうとする存在と戦う事になる」という警告の所為だ。
そしてそれはこの世界でも同じだ。否、場合によっては？先生？が危惧した以上バグに花城摩理という存在はなっているのかもしれない。
その懸念が摩理に全力を出すことを躊躇わせていた。

走ること数分、四人を目視する。
ビルの屋上。しかも自らのデバイスを起動させ、騎士服まで身に纏っている。
摩理は足に力を込め、思い切り跳躍し四人の目の前に着地した。
「ま、摩理ちゃん？」
四人とも突然登場した摩理に驚いていた。
シャマルもいきなり現れた摩理を思わず呼んだだけで、現状を理解してはいないだろう。
「……摩理。どうしてここにいる？」
真っ先に我に返ったのはシグナム。さすがヴォルケンリッターの将を名乗るだけの事はある。
「ふふふ。夜の散歩よ。あなた達と同じに、ね」
「な、ふざけんなよ摩理！私達がしようとしてる事、止めに来たんだろ！！」
「ふーん。つまりあなた達は、私が止めるような事をするつもりなのね？」
摩理の返答にヴィータはカマをかけられた事に気付き、顔を歪める。
「……ならお前は何をしに来たのだ？本当に散歩だけでは無いのだろう？」
ザフィーラの問いに摩理は頷く。
「私の目的は確認よ。」
「確認？」

眉をひそめるザフィーラ。他の三人も同様だ。
「ええ。今日の診断結果、はやての症状。悪化しているんでしょ？しかも命の危機もある程度に」
「「「「！？」」」」
四人の驚きで、摩理は自分の予想が外れていなかったことを確信した。
「そしてあなた達は、はやてを救う手段に心当たりがある。違うかしら？」
摩理の問いに四人は沈黙した。つまり摩理の推測を肯定したという事だ。
「……はやてを闇の書の本当の主にする」
「本当の主？」
ヴィータの言葉に摩理は首をかしげた。
「そうだ。はやてが闇の書の本当の主になれば、はやての病気は治る。少なくても進行は止まる筈だ！」
ヴィータの態度は必至だ。嘘をついている様子は無い。
闇の書の本当の主。つまり蒐集をし、闇の書を完成させるという事だろう。
その為にはリンカーコアを集めなければならない。その為にデバイスを手に、騎士服を身に纏ったのだろうと、摩理は納得した。
「摩理。もしお前が我らを止めようとするなら、たとえお前でも……」
シグナムはデバイスレヴァンティンを構えた。もし摩理が止めると言えば、間違いなく戦闘になるだろう。
他の三人もすぐさま戦闘態勢に入る。だが摩理は……
「で？どこで狩るの？」
と訊ねた。
「「「「はっ？」」」」
四人は呆気に取られたように口をあける。
「はやてを救う為に必要なんでしょ？なら早く行きましょう。それ

ともまだ何かあるの？」
　摩理の発言に四人は絶句した。
「別にあなた達は相手を殺すつもりは無いんでしょ？なら問題は無いわ」
「え、あ、摩理ちゃん。分かってて言ってるの？蒐集はそんな簡単な事じゃないのよ。相手は無抵抗じゃないし、最悪命を落とすことだって」
「だから何？相手が何者でも、どれほど困難でも、そんなこと関係無いわ。はやてとあなた達家族を守る。私が願った夢の続き。その邪魔をさせない」
　摩理は四人を見据える。その目はこの数カ月見てきた、普段のどこか儚げな雰囲気のある摩理の目では無い。
　出会った最初、四人を見つめた戦士の目だ。
「わかった。だが、足手まといになる様なら、今後蒐集には参加させない」
「ッ！？シグナム！？」
　シャマルは驚きの声を上げるが、ヴィータ、ザフィーラは何も言わない。
　摩理が絶対引かない事をこの数カ月の生活で理解しているからだ。
「では遅れるなよ、摩理」
　シグナムがそう言うと、三角形の魔法陣が地面に映し出され、五人の姿が消えた。

第五話　守護騎士とハンター　後編

「……魔法に異世界。話には聞いていたけど、ここまでとは思わなかったわ」
それが正直な摩理の感想だった。先程までいた海鳴の町では無く、見渡すばかりの荒野の高台。
一瞬で移動したのだが、あまりのギャップに摩理は驚きを隠せなかった。
「さて摩理、お前にも蒐集を手伝ってもらうが、お前の実力を私たちは知らない。そこで一人でこの世界の魔力を持った原生生物を倒してもらえるか？」
「構わないわ。で、獲物は？」
「そうだな……とりあえず」
シグナムが獲物となる生物を探す中、大量の土煙を見つける。
サイにも似た凶暴そうな動物の群れだ。ざっと見ても、６０匹はいそうな群れだ。しかもかなりの興奮状態だ。
「ちょうどいい獲物ね。シグナムさん、あれでいいわよね？」
「な！？馬鹿を言うな！！」
「そうよ。あんなの私達でも一人では無理だわ」
「ちょっと待てよ摩理」
「そうだ、いくらなんでも無謀だ」
シグナム、シャマル、ヴィータ、ザフィーラが口々に止めるが、摩理はにこりと微笑むと、四人を振り切り、崖を飛び降りた。
「な、あの馬鹿！」
ヴィータは真っ先に駆け出し、三人もそれに続く。摩理は飛行魔法はおろか、高高度落下のリカバリーさえ習得していない。この高さで落ちれば、まず間違いなく大怪我もしくは死。
慌てた四人を止めたのは、眼下に突如舞い上がった、銀色の粒子だった。

落下する摩理はアリスに頼みバリアジャケットを構築してもらった。摩理の姿が一瞬で変化する。漆黒のタイツにウェア。短いホットパンツにブーツ。そして白衣化を改造しベルトを着けたコートと口元を隠すためのマフラー。

かつて狩りをしていた時に纏っていた装備が、アリスによって再現される。

「さって、久しぶりの狩り。ちょうどいいウォーミングアップが出来そうね」

摩理はそう言うと、アリスから触手が伸び摩理の体に突き刺さる。一瞬で同化状態の証である銀色の模様が浮かべ、摩理はアリスを思い切り横薙ぎに振りぬいた。

アリスから大量の銀色の鱗粉が吹き荒れる。

摩理の横薙ぎに合わせるように鱗粉も同じ軌跡を辿る。銀色の刃のように、銀色の衝撃波のように、摩理の放った鱗粉はサイの群れを襲った。

鱗粉の勢いと強化された身体能力を使い、華麗に着地した摩理は周囲を見渡す。

摩理の一撃で十数匹のサイは倒せたが、まだ半数以上は残っていた。

サイの群れは摩理を外敵と認知し、猛然と摩理に向かってくる。

摩理は好戦的な笑みを浮かべながら、再びアリスを横薙ぎに振るった。

槍でもあるアリスは前列のサイをことごとく一撃で行動不能にし、槍の軌跡と共に放たれる鱗粉が後続のサイを薙ぎ倒す。

それでも群れとしてはまだまだ半数も倒せていない。

仲間が倒されてなお突撃するサイ。そのおかげか一匹が摩理の目の前まで迫れた。

摩理はその愚直な突進を避けもせず、真正面から受け止めた。
サイに人間並の知能があったら驚愕しただろう。見た目儚げで幼い少女が、自分の様な巨体を片手で受け止めたという事実を。
そして恐怖しただろ。摩理の浮かべる冷酷な笑みを。
摩理は片手でサイを持ち上げ、後続の群れに思い切り投擲した。
サイ同士の衝突に群れはさらなる混乱に陥った。
摩理はその様子を確認すると思い切り跳躍し、群れ全体を視界に入れた。
アリスに魔力を込める。今までは半ば勘を取り戻すための小手調べ。摩理が本格的に力を込めて槍を振るうのは今回が始めてだ。
十分に魔力を込めたアリスを摩理は全力で振りおろした。
放たれた大量の鱗粉は先程までの威力の比では無く、群れ全体を一撃で飲み込んだ。

歴戦の騎士であるヴォルケンリッターは、目の前の光景を唖然とした様子で見ていた。
摩理が戦士である事は知っていたが、ここまで圧倒的な力を秘めているとは思わなかった。
通常の魔法（ミッド式やベルカ式）とは異なる魔法。いや、摩理が使ったのは魔力を使用する違う何かと説明されても納得できる異質な力だ。
そして圧倒的な数を前にして恐れぬ精神と、まるで準備運動の様に簡単にあしらう戦闘の様子に四人は知らず戦慄する。
一体どのような経験を経れば、このような事が出来るのか想像さえつかない。そして同時に思う。？花城摩理？という存在が敵で無かった事に心底感謝した。
「で？合格ですか？」

「これほどの事をされては、不合格とは言えない。改めて摩理。主はやての為に協力してくれ」
シグナムはそう言うと手を差し出した。
摩理は少しだけ、驚きと喜びにも似た表情を浮かべたが、すぐに微笑を浮かべ、シグナムの手を取った。
「ええ。もちろんよ」

その日、ヴォルケンリッターは再び闇の書の蒐集を開始した。
その日、この世界にとってバグたる少女が、再び槍を手に取った。
願いはただ一つ。?家族を守るため?
呪われた魔道書の騎士達と?ハンター?の名を持つ存在しないはずの少女の家族を守る戦いが始まった。

第五話　守護騎士とハンター　後編（後書き）

摩理と守護騎士の蒐集開始の話ですが、摩理の強さを上手く表現できたか不安です。

むしろ強すぎたか？とも思います。

一応今の摩理の強さは、原作の「夢まどろむ迷子」で？かなかな？と対峙した時の強さをイメージしていますが……ちょっと自信がありません。

さて、次の話から原作キャラをどんどん登場させる予定です。

また、ほかのムシウタのキャラ登場は現状未定です。もし意見、要望があったら感想に書いてください。

第七話　VS管理局

まどろみの中、摩理は不思議な夢を見た。
やさしい母が娘とピクニックにいっている夢。
それ自体は何ら不思議では無い。だが摩理は母親と二人でピクニックに行った事は無い。
摩理はとっさに違う誰かの記憶ではないかと思った。なら誰の記憶か？
真っ先に思い浮かんだのは摩理の親友の亜梨子だが、亜梨子の母は亜梨子が物心つく前に亡くなったと聞いている。
顔を確認したいが、夢は輪郭がぼやけ、登場人物の顔を確認させない。
だが娘の方が摩理の方へ視線を向けた。
『摩理。あなたの？夢？は何？』
『え？』
夢の中の人物に訊ねられ、摩理は驚きの声を上げたが、直ぐに自らの夢を口にした。
『私は生きたい。大切な人達と共に生きたい』
『私の？夢？と似てるね。……もう時間だね。今度はもっとゆっくりお話しようね』
その時まで見えなかった娘の顔がはっきりと確認できた。流れるようにきれいな金髪に赤い瞳の少女。
それを認識した瞬間、摩理は現実へと戻った。

目を覚ました摩理は周囲を見渡す。本が並んだ室内を見て思い出す。
（ああ、今日ははやてと一緒に図書館に来たんだっけ。それで……

…絵本を見ているうちに寝てしまったのね）
最近の摩理はよく夜更かしをするため、昼間にふと眠気を覚える事があった。そして今回は耐え切れず眠ってしまったようだ。
（それにしてもこの絵本を見ながら眠ってしまうなんて……）
摩理は苦笑した。絵本のタイトルは「魔法の薬」
かつて摩理が何度も読み返した絵本で、摩理にとってとても特別な意味を持つ絵本だ。
はやてと暮らすようになってから絵本を見る機会が無かったので、懐かしさのあまりつてに取ったら眠ってしまった。
（私も疲れているのね。シグナムさん達ほどでは無いけど、私も蒐集に参加してるから、無意識に疲れがたまったのかしら？それにあの夢は……）
摩理はあの金髪の少女に見覚えが全くなかった。摩理の記憶では金髪の知り合いなど、？霞王？くらいだ。もっともあの戦闘狂があんな穏やかな少女時代を送っているところを摩理は残念ながら想像出来ない。
（まあ、考えてもしょうが無いわね。さてと、そろそろはやてと合流しましょう）
摩理は図書館を歩きながらはやてを探した。
はやては見知らぬ少女と雑談していた。
「あ、摩理！紹介するでこの子、月村すずかちゃんや」
どうやら、本を探している最中に仲良くなったようだ。摩理は微笑しながら自己紹介をした。
「初めまして、花城摩理です。よろしくね。月村すずかさん」
「あ～堅いで摩理。もっとフレンドリーにいくべきや！」
「はやてはフレンドリーすぎるわ。もう少し上品にした方が女の子らしく見えるわよ」
「なッ！？ま～り～！うちのどこが女の子らしくない言うんや！」
はやてと摩理の掛け合いに、すずかは思わず噴き出した。
「ご、ごめんなさい。でも花城さん、最初見た時は凄く綺麗で大人

っぽいイメージだったけど、はやてちゃんと一緒だとイメージかまるで違くて、つい」
「別に気にしなくていいよ。摩理も私と暮らし始めた頃とずいぶん性格変わったし」
「ええ、そうね。どこかの関西弁の女の子に鍛えられてるから」
「どこの関西弁の女の子やろな～純真な摩理を、こうまでハッキリモノ言う子に変えたんわ」
「さて誰かしらね。それはそうと、すずかさん。私の事は摩理でいいわ」
「なら、私もさんづけは、ちょっと……」
「そう？ならすずか、よろしくね」
「よろしくね、摩理ちゃん」

その後、シグナムが迎えに来たのでその場を別れた、はやてと摩理は家に帰り夕飯の支度をしていた。
シグナムは帰ってこないヴィータとザフィーラを迎えに再び、家を出た。
シャマルははやてと摩理の手伝い。あくまで手伝いだ。
かつてシャマルに料理をさせ、その料理を口にした摩理は、一瞬で意識を刈り取られた。
摩理は思うシャマルの料理は、きっと最強の虫憑き達の能力を超えた、最強の破壊兵器だと。
この料理を再び口にするくらいなら、摩理は最強の虫憑き達と戦った方がマシだと……
「それにしても、三人とも遅いな～」
料理はもう下ごしらえを終え、後は三人が帰ってくれば最後の仕上げを終わらせ食べられる状態だ。それに三人が夕食の時間に遅れる事など今まで無かった事だ。

「そうですね。そうだ！私、探してきます」
そう言うと、シャマルはエプロンを脱ぎ、摩理やはやてが止める間もなく家を出て行った。
その様子に、摩理はあからさまに不自然さを感じた。シャマルの慌てようただ事ではない。
「……私も行くわ。はやて。少しだけ待っててね」
「ちょお、摩理！」
はやての制止を聞かず、家を飛び出す摩理。周囲にはすでにシャマルの姿は無い。
摩理は無言でアリスを取り出し、意識を集中。シャマルの魔力の気配は高速で移動中。
シグナム達の魔力は、おそらく結界を張っているのだろうか妙に曖昧だ。そこまではいい、結界内にはシグナム達以外にも複数の魔力の気配がする。その一つは摩理にも心当たりがあった。
この世界にいる高レベルの魔力保持者の気配だ。
（シグナム達、まさか効率を優先するあまりに、この世界の魔道士に手を出したの！？あれだけリスクのあるこの世界での蒐集をしてはいけないと釘を刺したのに！）
摩理は蒐集を開始する際、シグナム達にこう言った。
（自分達の縄張りでの狩りは絶対するなと！）
かつて摩理が狩りをしていた時も、自分のいる病院周辺での狩りだけは絶対しなかった。
理由は単純。もし自分の拠点を知られれば、それだけ先手を取られやすい。
先手を取られれば、思わぬ負傷や予想外の事態に陥る可能性が高くなる。
そして何よりはやてを自分達のわがままに、巻き込む可能性も大幅に増える。
だから摩理はこの世界にいる魔道士には絶対手を出さなかったし、居場所についても何も口にしなかった。

多分焦っての行動だろうが、蒐集はあくまで殺しではない。相手は必ず生かす。その誓いが在るのだ。
生かした相手の報復などを考えれば、この世界でだけは蒐集をしてはいけない。
だがこうなってしまっては、仕方ない。摩理はアリスを起動させる。
一瞬でバリアジャケットを纏い、アリスが槍へと変化。
触手が摩理に突き刺さり、銀色の模様がアリスを持った右手と左足に浮かび上がる。
（準備万端ね。お願い間に合って）
摩理は夜の街を疾走した。

「くッ！放しやがれ！」
バインドで拘束されたヴィータは、目の前の黒髪の執務官と金髪の民族衣装型のバリアジャケットを纏った二人の少年に噛みつかんばかりの勢いで、睨みつける。
「悪いがそれは出来ない。君達が民間人への暴行を加え、さらに最近起こっている魔道士襲撃事件の容疑者となれば放すわけがない」
管理局の執務官・クロノ・ハラオウンが油断なくそう言うと、ヴィータは悔しげに表情を歪ませる。
（ちくしょう。捕まるなんて情けねえ！シグナムもザフィーラも今は嘱託の魔道士とその守護獣の相手で手が離せねえ！シャマルはバックアップ専門。どうやってもこの二人を出し抜くのは難しい）
ヴィータは悔しげに現状を分析していた。だがヴィータにはまだ起死回生の手段がった。
摩理の存在だ。摩理ならこの二人を圧倒するし、助けを求めればすぐにでも駆けつけるだろう。だがヴィータはそれをしなかった。
理由は摩理がこの世界での蒐集を拒んでいたからだ。だがヴィー

タ達は今回だけは摩理の意見を無視し内密に蒐集を行おった。
結果はいまだターゲットの少女から蒐集もできず、窮地にある現状だ。
自分達で招いた結果だけに助けを求めるのは、ヴィータのプライドが許さない。
だからどうにかして脱出しようとしているが、二人ともバインドの強度が強く思うようにバインドブレイクできない。
「さて、詳しい話を聞かせてもらおうか」
「クロノ、上だ！！」
金髪の少年、ユーノの叫びでクロノは上を見てゾッとした。頭上には今まで何故気付かなかったのかと疑問に思い程の魔力を槍に込めた白衣にも似たコートを纏った少女が、今まさにそれを振り下ろそうとしていた。
「ッ！！プロテクション！」
ユーノがとっさに張った防御呪文。そのお陰でクロノは槍の直撃だけは避ける事が出来た。かに見えた。
槍は一瞬だけプロテクションと拮抗したが、次の瞬間、槍はあっさりとユーノのプロテクションを破壊した。
クロノはその一瞬で槍の一撃を完全に回避したが、槍から放たれた銀色の粒子は完全に回避は出来なかった。
「ぐッ！？」
今まで様々な魔法と対峙してきたクロノだが、始めてみる魔法の一撃に苦悶の声を上げる。いやこれが魔法なのかさえ、クロノには理解できなかった。
「……君は何者だ！」
「ふふふ。気づいていないの？管理局員さん。今、貴方が捕えた騎士の主。そう言えば貴方は私が誰か解るかしら？」
少女の返答はクロにとって予想外だった。クロノは先程捕えた騎士が何者なのか知っていた。彼女は闇の書の守護騎士。その主を名乗るなら、目の前の少女は闇の書の主という事になる。

「一つ確認する。君が本当に闇の書の主なのか？」
「そうよ。でもさすがに本名は名乗らないわ。そうね、？ハンター？とでも呼んで貰おうかしら」
？ハンター？と名乗る少女はそう言いながらヴィータを庇うようにヴィータの正面に立ち、槍を構える。
クロノは？ハンター？とヴィータを見る。ヴィータは？ハンター？の登場に驚いている。
単純に後方にいる筈の主が救援に来た事に驚いている様に見えるが、クロノは妙な違和感を感じた。
一方の？ハンター？は口元をマフラーで隠しているので正確な事はわからないが、少なくとも嘘をついている雰囲気ではない。
「……まさか、主、自ら前線に出てくるとは思わなかったよ。管理局執務官、クロノ・ハラオウンだ。おとなしく武装を解除してもらう。今なら弁明の機会が君達にも与えられる」
クロノの言葉に？ハンター？は一瞬だけ驚き、直ぐに嗤い始めた。
「ふふふ、あはははは。管理局の執務官は優秀だって噂で聞いたけど、貴方はそうでもないようね。それとも貴方程度でも優秀な部類に入るのかしら？降伏勧告は相手を完全に打ち負かした後か、相手より圧倒的な力を持つ者が言う言葉よ？貴方程度が私に降伏勧告？面白い冗談だわ」
任務中、侮られたり、下に見られる事はクロノにも経験がある。だがこうまであからさまに見下されたのは初めてだ。
しかもあの闇の書の主にだ。クロノは激情に駆られそうになるのを必死に抑え、勤めて冷静に最終勧告を口にする。
「……つまり降伏の意思は無いと理解していいんだな。だったら手加減しない！」
クロノはそう言うと、手加減無しの砲撃魔法・ブレイズカノンを発射した。
だが、？ハンター？は槍から放たれる銀色の粒子を周囲に展開するだけでクロノのブレイズカノンを完全に防御した。だけではなく、

ヴィータを拘束するバインドすらも破壊した。
「な！？何だそれは！！」
「ふふふ。この程度で動揺するなんて未熟ね。百人の魔道士と戦ってから出直しなさい！」
？ハンター？はそう言うと、クロノの目の前から消えた。
少なくともクロノにはそう見えた。
「さよなら。小さな執務官さん」
その声はクロノ背後から聞こえた。振り返ろうとした瞬間、クロノは背後から凄まじい衝撃を受け、意識を完全に刈り取られた。
「クロノ！！」
意識を完全に失い、落下するクロノをユーノはただ見ている事しかできなかった。
もし助けに行けば、確実にクロノと同じ運命を辿る。
ユーノはクロノが撃墜される瞬間を見ていた。クロノからは瞬間移動にしか見えなかっただろうが、それは断じて違う。
？ハンター？は防御に使った粒子を様々な場所に銀色の足場として展開し、それを足場として使い、クロノの背後に回り込んだ。
ただその速度が異常なのだ。魔法にも瞬間的な高速移動はあるが、？ハンター？はそんなそぶりを見せず、フェイト並み、いやそれ以上の速度でクロノ背後に回り込んだ。
あれだけの速度で、しかも魔法を使うそぶりさえ見せずにあの移動力。考えられるのは単純な身体能力という事になるが、だとするとユーノは全く動けない。
迂闊に動いた瞬間、ユーノもクロノと同じように墜ちる。
「……どうやら時間ね。ヴィータ下に落ちた執務官からリンカーコアを回収して。シャマルがターゲットから魔力の蒐集を開始したわ」
「あ、ああ」
ヴィータはやや茫然と返事をしながら、クロノの元へと向かった。
「どうしたの？ヴィータを止めないのかしら？」
「残念だけど、君から視線をそらした瞬間、僕もやられる」

「ふふふ。執務官さんより実力差を見極められるようね。正解」
「一つ質問をいいかな」
「ええ、どうぞ」
「君は、何故飛行魔法で移動せず、わざわざ足場を作っての移動をしたんだ？」
「単純な話よ。私は飛行魔法を覚えて間もないのよ。浮遊するなら十分だけど、高速飛行はまず無理ね。それに足場を作っての移動の方が速いわ。こんな風に、ね」
？ハンター？はいつの間にかユーノのすぐ目の前にいた。瞬きの瞬間に移動したようだ。
その事実にユーノは完全に戦意を喪失した。
今、一歩でも動けば。いや、少しでも敵意を向けた瞬間、ユーノは？ハンター？に倒される。そう確信した。
その時ユーノには？ハンター？が悪魔に見えた。
敵対するものを躊躇無く倒す冷酷な悪魔に……
「ふふふ。さよなら」
？ハンター？はそう言うとユーノに無防備な背後を見せたが、ユーノはそれをただ見つめる事しかできなかった。？ハンター？に植え付けられた恐怖によって。

「摩理！どういうつもりだよ！勝手に闇の書の主を名乗るなんて！」
クロノのリンカーコアを回収したヴィータはご立腹な態度で、摩理に詰め寄った。
「な？何だそれは！摩理どういう事だ？」
先程放たれた桜色の砲撃によって結界が破壊されつつある中、そんな事を訊ねるヴィータにも、同調し一緒になって訊ねてくるシグナムにも摩理は呆れた。
「今は説明の時間は無いわ。早くこの場を」

離れようと、言おうとした摩理は一人の少女に視線を釘ずけにされた。
金色の髪に赤い瞳。水着にも似た黒いバリアジャケットに黒いマントをはおり、手にはボロボロの斧に似たデバイスを持つ少女。
初めてみる、間違いなく初対面だ。だが摩理にはその少女の事を？知って？いた。
「……フェ、フェイト？」
何故か言葉が口から勝手にこぼれた。
摩理の胸の中にどうしようもない罪悪感、愛おしさが溢れた。
（何これ？？誰の想い？なの？）
困惑する摩理の意思を無視し、口が勝手に叫びを上げる。
「フェイト！！！」
急に自分の名を呼ばれた少女。フェイトは驚きながらも摩理を見る。
フェイトに近づこうとした瞬間、結界の完全崩壊が始まった。
摩理は一瞬だけ躊躇したが、シグナム達と共にその場を離脱した。

「さて改めて訊ねる。どうして闇の書の主を名乗った？」
摩理は何故、助けにいった自分がこうして正座させられ、詰問口調で訊ねるられているのか不思議になったが、とりあえず説明する事にした。
「理由はただのかく乱と、隠蔽。はやての事を出来る限り管理局には知られたくなかったっから……」
「まあ、そうだろうな。現状その方が我らにも都合がいい。シグナムも納得したらどうだ」
「だがザフィーラ。それでは最悪、摩理も犯罪者として扱われる！」
「それはいいわ。私達は家族よ。その程度のリスク関係無いわ。それに……私の手は元々貴方達以上に血塗れだしね」

最後の呟きだけは聞かれないように、意識しながら摩理は答えた。
「……分かった。摩理に覚悟があるなら、我らは管理局との戦闘になった時のみ、摩理の事を主と呼ぶ」
シグナムはそう言うと、表情を崩した。
狼モードのザフィーラも犬の様にうずくまる。
「それはそうと、摩理。あの魔道士と顔見知りなのか？」
シグナムは興味本位で訊ねてきた。
フェイトはシグナムの鎧を打ち抜き、ダメージを与えたのだ。武人であるシグナムが興味を持つのは当然だろう。
「残念だけど初対面よ。でも何故か私自身もわからないけど、あの子の事を私は？知って？いる」
ひどく困惑したように言う摩理に、シグナムとザフィーラはさらに困惑したように摩理を見る。

摩理は知らない。自分が生き返る事の出来た原因を。そして？虫？の力以上に摩理の存在はこの世界に取って存在しないバグである事を。
摩理がそれを知るのはもう少し先の話……

第七話　ＶＳ管理局（後書き）

摩理の性格を少し変えてみました。もともと摩理は人付き合いが少ないから、内気なので、はやて達との生活で人見知りしない様にしてみました。

そして今回摩理が見た夢と、フェイトとの関係は……勘の良い人は気付くでしょう。伏線のつもりですが、上手くいくか不安です。

第八話　苦悩の管理局

その日、はやてと摩理はすずかの家に泊まりに来ていた。本来なら八神家で鍋パーティーをも要す予定だったが、守護騎士四人が時間になっても帰らず、三人で鍋は寂しいので急遽、すずかの家でお泊まり会となった。はやては勿論すずかも楽しんでいた。表面上は摩理も楽しんでいたが、実は摩理は内心焦っていた。

現在、守護騎士四人は管理局魔道士たちと戦闘中。しかも前回蒐集した白いバリアジャケットの少女とフェイトがデバイスにカートリッジシステムを取り付けたと、シグナム達から連絡を受けた。戦況は今は膠着状態だが、ちょっとのミスでどちらが優勢になるか分からない状況らしい。

本来なら摩理が救援に行けば、一気に戦局を有利にできるが、シグナム達から連絡を受けたのがすずかの家についてからだ。

今、摩理がすずかの家を長時間抜け出すの少し難しい。

なので摩理は直接戦闘をしていなシャマルに戦局を説明してもらい、状況次第で救援の手助けをする事にした。

そしてほどなく戦況は妙な事となった。

戦場と距離を取っていたシャマルが前回摩理が倒した執務官のクロノに見つかり、危うく捕えられそうになったが、そこに仮面をつけたあからさまに怪しい男性が救援に現れたらしい。

摩理としてはその仮面の人物の存在はどうにも気に入らなかったが、このタイミング以外での救援は不利にしかならないと思い。行動を開始した。

すずかとはやてに適当な理由をいい、部屋を出ると、すぐさま屋敷を出る。

「アリス。同化して」

『分かりました。摩理』

摩理は短く言うと、アリスが答えた。アリスから触手が伸び、瞬

時に摩理の両手両足に銀色の模様が浮かぶ。同化を終えた摩理は周囲に落ちていた適当な木の枝を拾い、跳躍し月村邸の屋根に登る。
「アリス、お願い」
摩理の言葉と同時に摩理の右手の模様から触手が伸び、持っていた木の枝に同化。
同化した木の枝は瞬時にアリスの起動状態に酷似した槍へと変化した。
本来同化型の？虫憑き？は、形状の条件の合った媒体を自分の武器とする事が出来る。実際摩理も？虫憑き？だった頃は、松葉杖を槍の媒体として使っていた。
亜梨子は専用のロッドを手にするまでは、その辺にある棒状の物を適当に使用していた。
その事からアリス以外の物にも同化させ、武器として使える事は知っていたが、アリス以上の媒体は無いし、今はアリス自体が同化能力の源だ。
無理に他の媒体を探す必要は無い。だが今回は違った。
摩理は擬似的に作った槍を構える。結界の方角は把握している。途中に障害物は無い。
摩理は現状込められる魔力を、すべて擬似的に作り出した槍に込める。
爆発的な輝きを放つ槍を、結界めがけ摩理は全力で投擲。
管理局の張った結界の強度がどの程度か知らないが、さすがにあれを耐えられるとは思わない。
完全に全力という訳ではないが、かなりの魔力を込めた。
先日見た桜色の砲撃クラスの威力はあると、摩理は予測していた。
『シャマルさん。今そっちに結界破壊の攻撃をしたわ。着弾後、うまく退避して』
摩理は念話でそう言うと、屋根を降り、はやてとすずかの元へと向かった。

「え？摩理ちゃん？」
今まさに、結界破壊の砲撃を使おうとしたシャマルに、摩理から意味不明な念話が届いた。
摩理が習得している魔法は念話に探査系魔法、そして飛行魔法だけだ。
飛行魔法も同化後の摩理の身体能力が高いため、精々空中に浮く為にしか使わない。
それに摩理の戦闘スタイルは同化を使用した圧倒的な身体能力を存分に使った接近戦。および鱗粉を使った中距離線を得意としている。
つまり摩理にはすずかの家からここまで攻撃する手段を持たないはずだ。
シャマルの知る限りでは。
だが摩理はシャマルの予想外の方法で結界破壊を実行した。
凄まじい速度で銀色に輝く閃光が結界に衝突。数秒の均衡後、結界に穴をあけた銀色の閃光結界の中心部にすさまじい衝撃と共、着弾。
結界内部は着弾の衝撃と閃光が放った銀色の鱗粉に包まれた。
結界は崩壊し始め、シャマル達には千載一遇の離脱チャンスとなる。
『みんな、摩理ちゃんが結界を破壊してくれたわ。離脱して！』
『『『おう』』』
その瞬間、守護騎士達は銀色の鱗粉舞う戦場を後にした。

「くッ！逃がしたか」

クロノは舌打ちしそうになる自分を抑えながら、仲間の下に向かう事にした。先程まで対峙していた仮面の男もドサクサに紛れて逃げたようだ。
あれだけ追い詰めながら、結局逃げられた事実にクロノは頭が痛くなった。
守護騎士四人だけでも辛い相手なのに、？ハンター？を名乗るクロノさえも圧倒する闇の書の主。さらに謎の仮面の男。
今回の闇の書の事件は一筋縄ではいかない。
クロノは改めて今回の事件が、いかに困難かを痛感した。
（正直増援が欲しいな。僕が敗れた以上、あの？ハンター？を名乗る闇の書の主は、アースラ所属の武装局員では歯が立たない。守護騎士と互角に戦っていた、なのはやフェイトも単独での戦闘ではおそらく？ハンター？には勝てないな）
冷静に分析すればするほど、明るい情報が無い事にクロノは気分が悪くなる。
（とりあえず家に戻って、敵戦力の分析を、皆を交えて行わなければな）
クロノはやや重い足取りながら、その場を後にした。

その後、クロノ達アースラスタッフが拠点に使ってるマンションに嘱託魔道士であるフェイトとその使い魔のアルフ。現地の協力者、高町なのは。民間協力者のユーノ。
そしてアースラの艦長リンディとクロノ。そしてその補佐のエイミィが揃い、今回の事件で分かっている事を話しあっていた。
一時的に不穏な空気になるが、リンディの機転もあり場の雰囲気は険悪にはならなかった。
「つまり、今回の事件は闇の書の主を捕まえればいいんだろ？」
アルフの単純な回答になのはとフェイト以外の全員が、苦い表情

を浮かべた。
「本来ならそうなんだが、正直？ハンター？を捕まえるには僕とユーノ。それになのはとフェイトにアルフの五人がかりでないと正直厳しいと思うな」
クロノのかなり弱気な発言になのは達三人は驚愕した。
「え！？？ハンター？さんってそんなに強いの？」
「それはいくらなんでも言いすぎだよ、クロノ。いくらクロノを倒したからって」
なのは、フェイトは異論を唱えるが、クロノ達は渋い顔を見せる。
「？ハンター？彼女は強い。フェイト並みの速度にベルカ騎士並みの接近技能。それだけでもミッドの魔道士では苦戦は確実だ。それに彼女の槍から放たれる粒子は、攻撃に防御もこなす未知の魔法。そして何より彼女は敵を倒すことに躊躇いが無い」
クロノは思い出したように顔をしかめる。
「正直な話、落とされる瞬間、見た彼女を僕は恐怖している。彼女の顔はまるで悪魔のように見えたよ」
クロノの言葉に無言で頷くユーノ。彼女と対峙しなければこの恐怖は理解できない。
「そ、それならロングレンジからの攻撃は？接近タイプの魔道士なら遠距離はそんなに得意じゃない」
フェイトの意見にエイミィが渋い顔でデータを表示した。
「それがそうでも無いみたい。彼女、遠距離から今日の結界を打ち向いたんだよ。単純な威力ならなのはちゃんのスターライトクラスはあるね。その事も踏まえて考えると彼女は間違いなく、魔道士ランクＳは確実だね」
その言葉になのは達は顔が青くなる。つまり？ハンター？は近接戦闘では難敵。しかも遠距離攻撃も持つ万能型のＳランク魔道士。
ＡＡＡランク魔道士である、なのはやフェイトでも手に余る相手だ。
「そうね。基本的には？ハンター？との単独での戦闘になったら迷

わず撤退して、二人以上の場合は臨機応変に対応というのが基本方針かしら」
リンディが今後の基本方針を言うと、全員が頷きその場は解散となった。

「は～なんだか大変な事になっちゃったね」
帰宅中、なのはは思わずため息をこぼした。
「うん。そうだね」
フェレットモードのユーノもなのはに同意する。
なにせ今後闇の書に関わるとなると、必然的に？ハンター？と関わる事となる。
？ハンター？がとんでもない実力者なのは、話だけでも十分理解できる。そんな相手と戦う事を考えれば溜息くらい出るだろう。
「それにしても？ハンター？さんて凄いんだね。映像で見たけど、私達と同じ年くらいなのに……」
なのはは思う。同い年くらいの女の子なら、もしかしたら、戦わずにお話を聞いてくれるかもしれない。と、考えていた。
（そうだよ。最初から戦う事ばかり考えてちゃいけない。お話して少しでも？ハンター？さんを説得できれば、ヴィータちゃん達、守護騎士さん達とも戦わなくて済むかもしれない）
なのははそう決心すると、次ハンターと接触するチャンスがあったら、真っ先にお話をしようと心に決めた。
ちょうどその時、なのはの携帯からメールの着信音が響いた。
メールを見るとすずかからの画像メールだ。
「なのは、誰から？」
「すずかちゃんからだよ。今、すずかちゃんの家にお友達がお泊まりに来てるんだって。ほら、八神はやてちゃんと花城摩理ちゃんだって」

なのはは画像をユーノにも見せる。
そこにはすずかと車椅子に座った少女はやてと、やさしげに微笑む摩理の姿が映し出されていた。

第九話　摩理となのは

広大な砂漠が広がる無人世界。そこで摩理とシグナムは巨大なミミズモドキを相手に戦っていた。
もちろん目的は蒐集なのだが、倒すだけならそう苦戦する相手ではないが、あくまで弱らせるとなると、シグナムと摩理の二人でもそれなりに苦戦する。
「摩理大丈夫か？」
「ええ。けど面倒ね。下手に力を強くすると簡単に殺せてしまうわ。手加減しながらの魔法生物の狩りはいつも気を使うわ」
摩理は愚痴をこぼした。かつての摩理の狩りは手加減など不要だったし、魔道士は大抵バリアジャケットを身につけているので、手加減も簡単だが、魔法生物には繊細な手加減必要となる。
摩理はその手加減がいまいち苦手だった。
「ぼやくな。これだけの獲物だ、魔道士ほどではないが、それなりのページにはなる」
「ええ。そうね」
摩理はそう言うとアリスを構えなおしたが、瞬間自分たちの頭上から強力な魔力を二つ感知した。
「サンダーレイジ」
「アクセルシューター」
桜色の魔力弾と黄金の雷がミミズモドキを一撃で倒した。
「「……」」
摩理とシグナムは無言で突然の乱入者を睨みつける。
「「うっ」」
睨まれた二人の少女、なのはとフェイトは妙に居心地の悪い気分になった。
「あ、あのお邪魔でしたか？」
それでも勇気を持って訊ねるフェイトだが、

「ああ。おかげで蒐集対象を潰された」
「ええ、そうね。私達の苦労を一瞬で無駄にされたわ」
二人の容赦ない言葉に場の雰囲気が、ますます気まずくなる。
「まあ、お前達管理局がここに来たという事は、私達を捕えに来たのだろ？なら前回の決着をつけよう。テスタロッサ！」
シグナムはそう言うと、レヴァンティンを構える。それを見たフェイトも表情が先程までの子供の表情から魔道士の顔へと変わる。
「悪いが手出しは無用だ」
シグナムの言葉に摩理は苦笑した。
「構わないわ。なら私の相手はあの子ね」
摩理もアリスを構える。
合理的に考えれば、いかにしてこの状況を二対二から二対一に変えるかが重要だ。
だがシグナムはこの幼い魔道士との決闘を望んだ。
だから摩理もそのシグナム気持ちをくむと同時に、フェイトとの戦いを見守る事にした。それと摩理にも理解できないが、何故かフェイトはシグナムにも負けない強い子だという確信があった。
「さて、ではいくぞ！テスタロッサ」
「はい、シグナム！」
二人は同時に空を疾走した。

「ふふふ、派手に始めたわね。それじゃあ、こっちも始めましょうか？管理局の魔道士さん？」
摩理はなのはへと視線を移した。だがなのははどういう訳か摩理と対峙しているのに戦意が無い。それどころか……
「レイジングハート、お願い」
『ハイマスター』
己のデバイスである杖を待機モードにした。

「？どういうつもり」
「あ、あの、？ハンター？さんどうしても闘わないといけないんですか？」
なのはの問いかけに、摩理は首をかしげた。
「？……貴方達は私達を捕えに来たんでしょ？私達は捕まるつもりも、蒐集を止めるつもりもないわ。なら闘わない。という選択以外ないわ」
「でも、話し合えばきっと戦う以外の解決もあるかもしれません！」
なのはの真剣な声に摩理は驚いた。
（この子、本気なのかしら？本気で話し合いでどうにかなると思っているの？）
摩理は疑ったが、なのはの真剣で真直ぐな表情が、亜梨子と重なる。
（ふふふ、この世界はほんとに困るわ。亜梨子と同じ目をする子が二人もいるなんて）
摩理はそう思うと、構えていたアリスを下げる。あの目をする子を傷つけるという事は、親友である亜梨子を、家族であるはやてを傷つけるような気がしたからだ。
「分かったわ」
「ほ、ホントですか！」
「ええ。騙し討ちする趣味は無いわ。でもここだと二人の流れ弾に巻き込まれかねないわね。そうね、あの岩場に移動しましょ」
摩理は先導するように岩場へと移動を始めた。なのはも摩理の後を追うように続く。

摩理は岩場に辿り着くと手頃な岩に腰をおろし、腰に下げたポーチからミネラルウォーターを取り出し一気にのどに流し込む。
「貴方も飲む？」

「え、いえいいです」
正直なのはは摩理の行動に少し戸惑っていた。話しをしたいと言っても、あの？ハンター？が簡単に受け入れるとは正直思っていなかった。しかも今の彼女はどう見ても、先程まで対峙していた格上の魔道士には見えなかった。
その無防備な姿になのはは、もしかしたら仲良くなれるかもと思うほどに、今の彼女は普通だった。
「それで？何を話したいの？管理局の魔道士さん」
「あ、なのはです。高町なのは」
「そう。で？高町さんは私と何を話したいの？」
「……？ハンター？さんは如何して闇の書の蒐集をしてるんですか？」
「そうね。一言でいえば、自分の為ね」
摩理は少しだけ皮肉げに嗤った。
「自分の為？じゃあ闇の書を完成させて、すごい力が欲しいんですか？」
「力？そんなモノ要らないわ。私が欲しいのは、もっとささやかなモノよ」
「？何ですか、それ」
「かんたに説明すれば、闇の書を完成させることで救われる家族がいる。だから闇の書を完成させるそれだけよ」
「でも、それならなんで自分の為になるんですか！？助けたい人の為じゃないんですか！？」
なのはの驚いた声に摩理は自嘲の笑みを浮かべる。
「私はね、自分の行動の責任を他人に押し付けるつもりは無いわ。私は自分のワガママで他人を傷つける事を選んだわ。それを他人の所為にするつもりは無いわ。まして責任を押し付けもしない」
摩理の断言する口調に、なのはは何も言えなかった。
「貴方達からすれば私の行動は犯罪でしょうね。でも、私にとってはそんな事どうでもいいわ。邪魔するなら倒す。今までだってずっ

とそうして来たわ」
摩理はあえて殺すとは言わなかった。摩理はすでに何人もの人間を死ぬより辛い目にあわせて来たのだ。そんな自分が今更他人の命を奪う事に躊躇いなどありはしないが、それをなのはに言う必要は無い。
「それで？私の理由を聞いたあなたはどうするの？」
「……その前に一つ聞いていいですか？」
摩理は無言で頷く。
「もしも、闇の書が？ハンター？さんの望みを叶えられなかったら、どうするんですか？もし危険な物で逆に？ハンター？さんの家族を危険にさらす物なら……」
「簡単よ。闇の書を止める。そして別の方法を探すわ。私はね、もう二度と手放したくないの、あの暖かい場所を」
摩理の意思になのはは何も言えなかった。摩理の意思は何者にも曲げられない。迷い無い声になのは初めて同世代の少女である摩理に尊敬と憧れを感じた。
その瞬間、異変が起きた。
摩理のデバイスであるアリスが不規則に光りだした。
「え？どうしたんですか？」
「……どうやら話はここまでね。高町さん一緒に来て。シグナム達に何かあったみたいだわ」
摩理はアリスを手にすると、シグナム達が闘っているであろう場所に向かって跳躍した。なのはも慌ててそのあとを追い、驚くべき光景を目にする。
そこには仮面の男によってリンカーコアを抜き取られていたフェイトの姿があった。

第九話　摩理となのは（後書き）

え～次回は摩理さんの本気と原作破壊を実施します。どういう展開になるかは少しだけ楽しみにしていてください。

第十話　小さなバグ

リンカーコアを抜き取られたフェイトを見た摩理は、何故か仮面の男に対して無性に怒りを感じていた。
何故怒りを感じるのかまでは理解できなったが、摩理は元々この仮面の男の事を不審に思っていた。
摩理はこの仮面の男をここで倒すことを決めた。
「シグナムさん！フェイトを連れて下がって！」
摩理はそう言うと、フェイトを拘束する仮面の男の顔に向けて、アリスで突きを放つ。
仮面の男はフェイトをあっさりと手放し、摩理の突きをかわす。
解放されたフェイトをシグナムが確保した瞬間、仮面の男との戦闘に意識を集中する。摩理の意思に反応したのだろ。摩理の体に浮かぶ銀色の模様が腕や足だけでなく、頬や瞳も浸食する。
そしては放たれる圧倒的なプレッシャーにその場にいる全員が硬直する。
？ハンター？花城摩理の本気だった。
そして摩理の思考も昔に戻る。かつて多くの虫憑きを狩った冷酷無慈悲な？ハンター？に。
この世界ではやてに出会ってから摩理は、無意識または意識的に？ハンター？としての自分を抑えていた。それは蒐集の時も変わらない。
蒐集はあくまで殺さずだ。？ハンター？としての感覚では全て殺してしまう。だから摩理はそれを抑えた。
だが今回は違う。目の前にいるのは明確な？敵？だ。故に摩理は出し惜しみなどしない。全てを用いて目の前の男を？狩る？
「……？ハンター？私はあくまで争うつもりは無い。むしろ蒐集を手助けしている。それなのに何故刃を向ける？」
仮面の男は無駄な戦闘をしたくないのだろう。摩理にそう語りか

けたが、摩理はマフラーで隠れた口元に冷酷な笑みを浮かべると、問答無用で仮面の男にアリスを振り下ろす。
今までとは比べ物ならない速さで繰り出される槍の一撃を仮面の男は回避するが、アリスから放たれる鱗粉の余波に絶句する。
放たれた鱗粉は砂漠に大きな穴をあけた。もし直撃していれば非殺傷指定でも確実に一撃で撃破される。
「なッ！？」
驚きの声を上げる仮面の男。だがそれはその光景を見ていたシグナムとなのはも同じだろう。
摩理が強いのはシグナムもなのはも知っていた。だがここまで圧倒的な強さだとは知らなかった。
今も摩理は大地を駆け、空を縦横無尽に跳び回りながら、仮面の男を追い詰めていく。仮面の男は摩理の槍を防御、鱗粉を回避しかろうじて大きなダメージを防いでいるが、それも長くは続かない。なにせ摩理の攻撃は時間を追うごとに速く、鋭く、そして強大になっていった。

仮面の男こと、リーゼ・ロッテは今の状況に焦っていた。
奇襲により強大な魔力を持つフェイトを蒐集したまでは良かった。だが守護騎士の協力者？ハンター？を名乗る少女がこうもあからさまに襲ってくるとは予想外だった。
そもそも彼女達は？ハンター？をそれほど危険視していなかった。強い力を持つ事は知っていたが、それでも所詮九歳の子供。
自分達の邪魔できる存在ではないと思っていた。
だが違う。この子供は違うと。ロッテは認識した。
その瞳は冷酷で無慈悲、敵対した瞬間、その事を深く理解した。
ただの子供がこんな目をするはずが無い。この少女はきっと？戦闘？を経験している。

本当の命のやり取りに近い？戦闘？を。そして？戦闘？の中で多くの人を踏みつけて、きたのだろ。
（やばいよコイツ。本気で殺しにきてる）
ロッテは迫りくる恐怖に耐えながらも、摩理の攻撃に耐え続けた。だがそれも長く続かなかった。今まで単調な攻撃ばかり繰り返していた摩理がアリスを手放し一気にロッテの間合いの内、肉弾戦の距離まで詰め寄り、魔力を込めた掌低をロッテの体に叩き込んだ。
「ぐッ！？」
とっさに防御したが、それでも威力を殺しきれず蹲るロッテ。
摩理が手をかざすと、アリスから触手が伸び、再び摩理の手に戻る。
「ふふふ。同化型の武器は強化した武器だけじゃないわ。強化された肉体も立派な武器よ」
摩理はアリスをロッテののど元に突きつけ、
「謝っても許さないわよ」
摩理は残忍な笑みを浮かべながらロッテを見下ろしていた。
その時、ロッテの恐怖は限界を超えた。震える手を体をどうにか表に出さないようにするのが限界だった。
「さて、終わりよ」
「お前がな」
摩理がアリスでロッテの喉を貫こうとした時、背後から声が響くと同時に、摩理、戦闘に巻き込まれないように距離を取っていたなのは、フェイトを抱えていたシグナムが同時にバインドで動きを拘束された。
「大丈夫か？」
背後から現れたのは、先程まで摩理と戦っていた仮面の男と同じ姿の男だ。
「お前は調子に乗りすぎだ。ここで消えろ」
新たに現れた男は摩理を殺そうと手に魔力を集める。
だが摩理はその男の行為を嘲笑った。
「ふふふ。この程度で勝ったつもり？だとしたら貴方達、魔道士は

よほど間抜けなのね。私が貴方の存在に気付いていないと思った？魔力を持つ存在はアリスが教えてくれるわ。だから待っていたの貴方がここまで近寄るのを！」
摩理がそう言った瞬間、アリスから大量の鱗粉が吹き荒れる。
鱗粉は近くにいた仮面の男達だけでなく、離れたシグナムなのはをも包み込む。
鱗粉に包まれた瞬間、なのはシグナムを拘束するバインドがゆっくりと拘束力を失い、砕けた。
「これは一体？」
「何、これ」
シグナム、なのはも困惑した声を上げる。
『マスターこの粒子はＡＭＦの一種です』
「ＡＭＦってなに？」
『魔力結合を阻害するフィールド魔法の事です』
レイジングハートの解析に、なのはは勿論、シグナム、仮面の男達も驚く。
「これ、ＡＭＦって言われているのね。この世界では。私は領域支配と呼んでいるけど。まあこれで貴方達も終わり……？」
そこで摩理は表情を変えた。仮面の男達が苦しげにしていた。摩理のこの領域支配は相手にダメージを与える鱗粉とはまるで種類が違う鱗粉だ。
この鱗粉を体に浴びたところでダメージは全く与えられない。
不思議そうに眺めていた摩理の目の前で、仮面の男達に変化が起こった。
仮面の男達が猫っぽい耳のはえた女性に変化した。
「……これはさすがに予想外ね。まさか変身魔法で姿を変えた守護獣だったなんてね。で、誰の差し金かしら？」
摩理は再びアリスをロッテに突きつける。
「……素直に話せば命は助けるとか言うつもりか？」
ロッテは内心の怯えを隠すようにあえて敵意をむき出しに言うが、

摩理はそんなロッテには興味無く。
「別にあなたが話さないなら、もう一人に聞けばいいわ。貴方を殺した後でね」
摩理は冷徹に言いきると、もう一人の仮面の男こと、リーゼアリアは摩理を止めようと飛びかかろうとするが、フェイトを抱えていたはずのシグナムが間に入った。
「悪いがこれ以上傍観するつもりは無い！テスタロッサは高町に任せたからな。さて守護獣よ、同じ魔法が使えぬ同士だが、まさか騎士を相手に勝てるつもりではないだろうな？」
シグナムはレヴァンティンを構えながらアリアを牽制する。
周囲を見ればなのはもフェイトを守るようにレイジングハートを構えていた。
「ちッ！」
アリアは状況の不利さに思わず舌打ちをする。
もともとアリアは遠距離線を専門としていた。このＡＭＦの状況下では不利。しかも相手は魔道士で無く近接戦闘特化の騎士だ。
勝てる要素が無い。
アリアは少しだけ考え、
「分かった降参だ。このＡＭＦを解いて」
「残念だけどそれは出来ないわ。もう少ししたら構わないけどね」
摩理はそう言うと、ロッテを思い切り殴りつけ気絶させた。
「シグナムさんはそっちの彼女を監視して」
摩理はそう言うと、なのはとフェイトに近づく。
「フェイトの様子は？」
「え？あ、リンカーコアを抜かれているから、衰弱がひどいよ、早く治療しないと」
なのはが悲しげに言うと、摩理は少しだけ考え、
「分かったわ。他の守護騎士達もすぐ来るからフェイトの治療をしてもらうから、安心して」
と微笑んだ。

「え？あ、ありがとうございます。？ハンター？さん」

守護騎士と合流後、摩理は領域支配を解除しフェイトはシャマルによって治療を施されていた。

一方駆けつけたヴィータ、ザフィーラ、そしてフェイトの使い魔であるアルフは最初この妙な状況に困惑したが、今はとりあえず停戦し、アリアとロッテを拘束後、尋問を開始していた。

「さてと、じゃあ素直に吐けよ！お前ら誰の差し金だ！！」

ヴィータが二人に尋問を開始したが、二人は一向に口を利かない。その様子に苛立ったヴィータはアイゼンを構える。

「だ、駄目だよヴィータちゃん！」

「うるせい。放せ高町なんとか」

「なのはだよ！な、の、は！」

二人のじゃれあいにシグナム、ザフィーラ、アルフは苦笑するが、摩理だけは無言だ。

「どんな事されても私達は話さないよ！」

ロッテは凄んで言う。アリアも無言で頷く。

「いい度胸だ！なら、二人まとめてアイゼンのシミにしてやる！」

「だから駄目だってヴィータちゃん！」

今にも二人をまとめて倒そうとするヴィータを全力で止めようとするなのは。

だが二人のじゃれあいを止めたのは、摩理だった。

「そうよ、止めなさいヴィータ。この二人をアイゼンのシミにするのは」

「摩理！お前も止めるのか！？」

「違うわ。まずこの二人から蒐集をしてから叩き潰すなり斬るなりすればいいわ」

「「「「「「「！！」」」」」」」

その場にいる全員が驚きを浮かべる。
「確かに有効だが、いいのか？背後関係を調べてからの方が」
「そんな余裕私達にあるの？一刻も早く闇の書を完成させるためには仕方ないわ」
ザフィーラの意見を摩理は却下すると、闇の書を手にロッテとアリアから蒐集を開始した。
途中なのはとアルフが摩理を止めようとするが、守護騎士三人を相手に出来ないと諦めたようだ。
「蒐集完了ね。思わぬ収穫もあったし帰りま」
そこで摩理の言葉は途切れた。突然全員の目の前に巨大な転移魔法陣が現れ、中から数十人の武装局員とクロノが現れた。
「なのは、アルフ、フェイト助けに来たぞ！……！？」
威勢よく助けに来たクロノだが、その場のカオス具合に言葉を失う。
まず何故かフェイトは守護騎士の一人に治療されているし、なのはもアルフも負けて捕まっている雰囲気では無い。そして何より……
「なんでアリアとロッテがここにいる！？」
クロノの驚きの声に全員が反応する。
「貴様！この二人が何者なのか知っているのか！？」
シグナムはレヴァンティンを構えながらクロノに問いただす。
「あ、ああ。管理局員で僕の師匠だ」
クロノ言葉に守護騎士となのはとアルフは驚くが、摩理だけは難しい表情を浮かべた。
「その事も含め、詳しい話を聞きたい。全員武装を解除してくれ！」
クロノはやや困惑な声で全員の武装解除を促すが、摩理はアリスを構え、
「残念だけどそれは出来なくなったわ。詳しい事情とはここに倒れている二人に聞いて！それと、高町さんとフェイト、そしてアルフを貴方達に渡す訳にはいかなくなったわ」

摩理は一方的にそう言うと、アリスを使いクロノ達を中心とした領域を支配した。
「なっ！？何だこれは！？魔法が使えない！？」
慌てふためくクロノ達を摩理は一瞥すると、守護騎士達の下に向かった。
「摩理どういうつもりだ？」
「詳しい話は家でするわ。今は脱出が優先よ。高町さん達もいいわね」
なのはもアルフも何か言いたげだったが、摩理の勢いと治療中のフェイトの事もあり二人は摩理について行くことにした。
全員が転移魔法陣の光に包まれる、そしてその場には誰もいなくなった。

その時は誰も気づかなった。摩理のこの行動がこの事件を変えるバグとなる事を。

第十一話　真実　　前編

八神家の食卓は基本的には賑やかだが、その日は何とも言えない気まずい雰囲気が漂っていた。
原因は摩理が連れ帰って来た三人。正確にはフェイトは摩理の部屋で休んでいるので、実際には二人だ。
なのはとアルフの所為だろ。二人はどこか困惑と気まずさで居心地が悪そうだ。守護騎士四人も困惑と警戒で食事を楽しむ余裕は無い。
はやてもそんな雰囲気であまり食事を楽しむ余裕が無い。本来ならお客さんが来たら全力で歓迎するはやてだが、この状況でなにを言っても盛大にスベリそうなのではやても無言だ。
「？どうしたのみんな？食事の時は騒がしいくらいなのに、今日はやけに大人しいわね」
唯一リラックスしているのが摩理だけだった。不思議そうに尋ねる摩理に全員が「お前が原因だろ」的な視線を向けるが、摩理は気付かないのだろう。不思議そうにするだけだ。
「あーも、我慢できひん！摩理！一体どうゆう事や！いきなりなのはちゃんとフェイトちゃんを連れてきて、しかもシグナム達は妙に警戒心丸出し！しかもアルフさんみたいな犬耳な女の人まで連れてきて！詳しく事情を説明し！！」
「いいわよ」
はやての激怒に、摩理はノンタイムで返答する。あっさりとした摩理にはやても勢いをそがれる。
「ただしご飯を食べ終わってからね。長い話になるから……」
はやては丸めこまれたような気がして納得がいかなかったが、摩理を信じて食事を再開した。

「さてと、まずはやて。高町さんとフェイト。そしてアルフさん。三人は管理局の魔道士よ」
「へ？なのはちゃん達が？ホント？」
「うん。そうだよ」
はやてが思わず訊ねると、なのはも認める。
「そして、私達を捕まえる為に何度か戦ったわ」
「は？捕まえる？戦う？なんでや！」
「答えは、はやてなら分かるでしょ？私と守護騎士が管理局に追われる理由を」
摩理の問いかけにはやては、しばし無言だった。シグナム達もその無言がひどく苦しかった。
「……蒐集してたんか？」
出来ればハズレて欲しい。そんな願いが込められたはやての問いを摩理は、
「ええ」
あっさりと認めた。
「なんでや！なんでそんな事したんや！！私はそんな事みんなにさせとうない。皆は家族や！ここで平和に暮らす。蒐集はしない。そう約束したやろ！」
はやての言葉に、シグナムは唇を噛み、ヴィータは顔をうつむき、シャマルは苦しそうに顔をこわばらせ、ザフィーラも苦しそうに頭を下げた。
「ええ、そうよ。でもね、はやて。私達はあなたに生きて欲しいから蒐集を始めたのよ」
「！？」
「あなたの病気。闇の書が原因らしいわ。完成させれば、最低病気の進行は止まるらしいわ」
「でも、そんな……」
はやての瞳に涙が浮かぶ、その様子に守護騎士達は罪悪感が押し

寄せてくる。
「それに勘違いしないで。これは私達のワガママよ。どれだけ傷ついても、恨まれても、はやてに悲しい思いをさせても、それでもあなたに生きて欲しい」
「……摩理はズルイな。そんな言われたら、怒れへん」
はやては涙ながらに笑みを浮かべた。その様子に守護騎士達は安堵し、見守っていたなのは達もどこか嬉しそうな笑顔を浮かべる。
「？ハンター？さんが助けたい家族って、はやてちゃんのことだったんですね」
「ええ、そうよ」
「？ハンター？？摩理、なのはちゃんにそんな風に呼ばれとるんか」
落ち着いたのだろう。はやてが不思議そうに訊ねた。
「さすがに本名を名乗れないわ。だから昔呼ばれていた通り名を名乗っただけ」
「ずいぶんと物騒な通り名で呼ばれたんやなー摩理は」
はやての正直な感想に、摩理は苦笑した。
昔の事とはいえ、あの頃の摩理は他者からハンターと呼ばれる程の？虫？を狩っていたのだ。おもに自分のワガママで。
その事を思い出すと、自然と胸の奥が痛む。そんな自分が偽名とは言え自ら？ハンター？を名乗る日が来るとは、当時の自分では全く想像さえできなかっただろう。
ましてや誰かを救うための戦いを自分の様な人間がするなど、考えられなかったはずだ。
「その話はまた今度ね。それより今後の事を考えましょ。当面、管理局には二つの戦力があると考えた方がいいわ」
「二つ？どういう事だ摩理」
シグナムが不思議そうに訊ねる。他の面々も同じようだ。
「まず一つが高町さん達が行動を共にしていた、闇の書の完成阻止派。そしてロッテとアリアだったかしら？彼女達闇の書を完成させ何かに利用しようと考える派閥の二つよ」

「最初のはともかく二つ目はありえねーよ！闇の書は完成させたら主以外使えねーんだから」
ヴィータの否定の言葉に摩理は苦笑した。
「そうなの？でも可能性としては高いわ。なにも闇の書自体を直接利用できないのなら、はやてを利用するつもりかもしれないし」
「いや、それは無い。完成した闇の書の主に洗脳や脅迫などの手段は無意味だ」
「……ずいぶん便利なのね闇の書って。でもザフィーラ、それでもよ。彼らがこちらを支援するような行動をしたという事は、彼らが完成した闇の書に対して何らかの行動をする可能性は高いわ。なら私達は完成後も気を抜く事は出来ないわ」
「……確かにそうだな。すまん摩理。どうやら我らは楽観視しすぎたようだ」
「構わないわ」
摩理は短くそう言うと、アルフが疑問を口にした。
「でもさ、クロノいわく闇の書って完成後は破壊以外に力を行使できないって言ってたけど、それではやてを助けられるのかい？」
「！？なんですって！それ本当なの？」
驚く摩理にヴィータは猛然と反論する。
「そんな訳無いだろ！今までの闇の書の主は完成後……あ、あれ、思い出せない」
「そんな馬鹿な。なぜ我々は完成後の闇の書に関する記憶が無い！」
「どうして？そんな」
「どう言う事だ」
戸惑う守護騎士四人に他の四人も戸惑う。
「どう言う事や？なんでシグナム達が完成後の闇の書について知らないんや？」
「はやての疑問はもっともね。そうね、はやて。闇の書に今までの記録みたいなものは保存されていないのかしら？」
「分からんなーまあとりあえず調べてみよか」

予想外の事に一瞬驚くが、はやては闇の書のマスターだ。闇の書に問いかければ何かしらの情報が出る。摩理はそう思い提案した。
はやても闇の書の不可思議な部分が気になるので、さっそく調べようと闇の書に声をかけようとした時、
「主はやて。その前にお伝えしたい事があります」
突然シグナムが割って入った。
「どうしたんや？」
「いえ、実は蒐集以外にも私達は主はやてに隠し事をしていました」
「「！？」」
はやては勿論、摩理も驚く。
「どう言う事や？」
「実は闇の書には我らヴォルケンリッターとは別に、闇の書の管理をつかさどる管理者が存在がします」
「なんやて！？」
「そうなの？」
初めての話に驚くはやて。今まで蒐集を共にしてきた摩理も、そんな話は今まで誰も教えてくらなかったので摩理も驚いていた。
「はい。ですが管理者を起動するには蒐集が４００頁を超える事と、主はやての許可が必要です。主はやては蒐集を望んではいなかったのであえて伏せていました」
シグナムの説明に摩理は納得した。はやての性格なら管理者の存在を知ったら、きっと外に出してあげたいと思うだろう。
だがその為には頁を４００も集めなければならない。
そのことで、きっとはやてが心を痛めると危惧してに判断だ。摩理がシグナムの立場でもきっとそうしただろう。
「おし！なら、その子呼びだそ。闇の書お願い」
はやての願いに反応するように、闇の書から白い光が溢れ一人の女性へと変化する。白銀の髪に赤い瞳の女性へと。
「初めまして主はやて。闇の書の管理を務める物です」
「？名前はなんて言うんや？」

「私に名前はありません」
「な！？それはあかんよ！よし、これも主のお仕事や。そやな……
……うん。リインフォース！あなたの名前は祝福の風・リインフォースや！」

第十二話　真実　後編

「祝福の風・リインフォース……　私の名前……ありがとうございます。主はやて。わたしにこのような綺麗な名を授けてくれて」
リーンフォースは涙を浮かべながら、はやてに礼を告げる。
「え？や、そんな泣かんでも……私は名前が無いなんて寂しいだろなーおもうただけやし……」
「いえ、今までの主の誰もが私達を道具としてしか扱わなかったのです。管理者、いえリインフォースの気持ちは私にも理解できます」
シグナムの言葉にシャマル、ザフィーラも頷く。だが何故かヴィータだけが難しい表情を浮かべていた。
「そうか。なら今日からリインフォースも八神家の一員や！よろしくな」
「はい。主はやて」
嬉しそうなリインフォースに自然と笑みを浮かべるなのは。アルフも何故か嬉しげだ。
「……いい雰囲気のところ申し訳ないけど、リーンフォース。あなたに聞きたい事があるわ。聞かせてくれる？」
摩理はあえて訊ねた。本来なら出会う事の出来なかった二人の時間を大切にしたいが、現状では二の次だ。
リインフォースも理解しているのだろう、表情を改めて摩理の質問に答えた。
「管理局の言うとおり、闇の書は完成とほぼ同時に暴走を起こします。主を吸収し消滅するまで破壊をまき散らし続けます」
「「「「！？」」」」
リインフォースの告白に驚いたのは守護騎士四人だ。だがある意味当然だろう。なにしろ自分達の行為が、主を救うどころか、逆に不幸に叩き落とすに等しい行為だと知らされれば……
「何故そんな事に？」

「もとは闇の書は、夜天の書といわれる魔道書でしたが、度重なる改編により能力の一部が暴走を始め今の形に変化しました」
「暴走を止める手段はあるのかしら？」
「一応は存在します。主はやてが取り込まれた闇の書の中で主として闇の書に干渉すれば、もしかしたら暴走する部分だけを取り除くことは可能かもしれません」
「つまり完成後の闇の書の暴走を抑えながら、はやてが暴走部分を切り離せば、最悪はやてやあなた達は問題が無いのね」
「……はい。ただ切り離した暴走部分は膨大な魔力と、闇の書の転生機能を応用した再生能力を保有します。あれを滅ぼすのは困難です」
　リインフォースの説明に全員に暗い表情が浮かぶ。はやてが暴走部分を切り離せば、丸く収まると一瞬喜びかけたが、暴走部分がそこまで厄介な特性を秘めているとなると、そう上手くいかないかもしれない。
　最悪せっかく助けられたはやてが、暴走部分に殺されてしまう可能性もある。
「……リインフォース一つ聞いていいかしら？」
「ええ。構いません摩理」
「その暴走部分。もしかして？不死？なのかしら？」
「？不死？？いえ、そんな事はありません。困難ではあっても所詮は夜天の書の一部。破壊は可能です」
「そう、なら問題は無いわ。もし？不死？だと言われても、私ならどうにか出来る筈だから」
　摩理の妙に自信のある口ぶりになのはが思わず訊いた。
「あの？ハンター？さん。何か解決策でもあるんですか？」
「そんな具体的な物ではないけど。昔ね、ある人に言われたの。『君なら？不死？を殺せる』だからきっと暴走部分も私ならきっと破壊できるわ」
「？不死？を殺す？なんか矛盾してない？」

疑いの眼差しを向けるアルフ。他の皆も半信半疑だ。その様子に摩理は苦笑する。
？不死？を殺す力。矛盾する力。
確かに今思えば何と矛盾し、皮肉な力を授けられたと思うが、実際に摩理にはそれがある。なにより摩理はイレギュラーなバグだ。
なによりなのは達は勿論、守護騎士やはやてさえも知らない。？花城摩理？はここに存在すること自体、在りえない存在だという事を。
ただ自分の言っている事を信じてもらうには、実際力を使って見せる以外ないだろう。
「分かったわ。実際やってみましょう。高町さん、魔力弾を一つ作ってもらえるかしら。静止状態の物を」
「え？あ、ハイ」
なのはは集中し桜色の魔力弾を作りだした。
摩理はそれを確認すると、アリスを起動させ、ある能力を発動させる。
銀色の鱗粉がリビングを包む。銀色の鱗粉に、なのはとアルフ、守護騎士達も警戒の眼差しを向ける。
摩理が今まで使った鱗粉は攻撃の性のある鱗粉に、魔力の結合を阻害する鱗粉。そのどちらもがこんな室内で使う能力で無い事をはやてとリインフォース以外の全員が理解している。
実際はやては呑気に、「綺麗やなー」「そうですね」と、リーンフォースと摩理の鱗粉に見とれていた。
「……摩理、この鱗粉は一体何だ？」
シグナムは不審な眼差しで訊ねる。摩理の鱗粉が攻撃性の物なら、この場にいる全員がダメージを受けるし、もし魔力結合の阻害の鱗粉ならなのはの魔力弾はその存在を保てない。
だがこの鱗粉は違った。心地いいやさしさ、そして安堵感をもたらした。
「そうね。高町さん、あなたの魔力弾を操作してみて」

「え、あ、はい。……あ、あれ？」
魔力弾を操作しようとしたなのはは、困惑の声を上げる。最初は手さえかざさなかったなのはだが、今は手をかざし、全力全開で操作しようとしているが、魔力弾は一切動かない。
「一体何をしたんだ、摩理」
ザフィーラの問いに摩理は何でも無いように答えた。
「眠らせただけよ」
「眠らせたー？なにをだよ」
「魔力を」
「……はぁ？摩理、いくらなんでも魔力が眠るわけねーだろ」
ヴィータの意見は正論なのだろう。はやて以外の全員が頷く。
「そう言われても困るわ。これが私の本当の能力。魔力を、意思を深い眠りへといざなう力。これを用いれば暴走部分の再生能力も防げるわ」
摩理の言葉を誰もが信じられない表情で聞いた。
それだけ摩理の言う魔力を眠らせるという行為が非常識なのだ。
「ちなみに今のこれは、最低の力で発動させているわ。全力で展開したらあなた達も全員眠ってしまうわ」
摩理はそう言うと、鱗粉を解除する。と同時になのはの魔力弾はなのはの思い道理に動き出した。
「……つまりこれで暴走部分を眠らせ、そのスキに破壊すると？」
「ええ。でも暴走部分を見ない事には、どの程度の出力で能力を展開すればいいか分からないから、それはその場で臨機応変に行くしかないわ」
摩理の能力がもし暴走部分に効果があれば、守護騎士四人に摩理の五人だけで闇の書の呪いを解ける可能性がある。
あくまで効果があればの話だ。もし効果が無かった場合、最悪たった五人で世界を滅ぼしうる存在と戦う事になる。さすがにそんな事態は避けたい。

出来ればもう数人強力な魔道士がいれば、シグナム達も摩理の提案を受け入れただろう。
「さすがに不確定要素が多い。せめてあと数人優れた魔道士の手助けが必要だ」
「なら私も手伝います！私もはやてちゃんを助けたいです！！」
「私も手伝います」
なのはの声に同調するように、寝ているはずのフェイトがいつの間にかリビングの入口に来ていた。
「フェイトちゃん！起きて大丈夫なの」
「うん。話しは念話で摩理から聞かせてもらったから大体理解してる。はやてを助ける為に私にも手伝わせて」
「フェイトが手伝うなら、当然あたしも手伝うよ」
「ありがとな、なのはちゃん、フェイトちゃん、アルフさん」
涙を浮かべながら感謝を告げるはやて。
「私からもありがとう。高町さん、フェイト、アルフさん」
「あの？ハンター？さん。私の事はなのはって呼んで」
「なら私の事も摩理って呼んで。なのは」
「うん。摩理ちゃん」

なのは、フェイト、アルフの参戦で戦力的にはどうにかなる算段がついたがまだ二つ問題が存在した。
「管理局と蒐集か……」
そうこれからやる事は管理局にとっては防ぎたい事態だ。当然協力はしてもらえないと考えられる。
さらに管理局には闇の書を利用しようと考える勢力が存在する以上、もし協力が受け入れられても土壇場で介入されればせっかくの作戦が台無しにされる可能性が高い。なので今回管理局には協力を

求めない方針に決まったが、そうなると蒐集が困難になる。
いくらなのは達が協力してくれるといっても、さすがに蒐集まで手伝ってもらうつもりは無かった。
「シャマル、闇の書はあと何ページくらいなん」
「えっと、ちょっと待ってね。今回予想外の収穫もあったからまだ確認してないけど、
えっと……今６００ページね」
「あと、６６ページか。残り少ないとはいえ、少し多いな。今は主はやての体もそうだが、テスタロッサ達の事もある。そう時間をかけられん」
シグナムの意見。これこそが皆の不安要素だ。
はやての体はまだ持つだろうが、現状時間をかければ確実に、管理局はこちらを補足するだろう。
あの使い魔二人が闇の書を狙っていたのなら、確実に主であるはやての居場所を把握している。
そんな中で蒐集に時間をかけるのは愚策だ。
また戦力であるフェイトの回復は数日程度で済む。その数日で６６頁を埋めるには、魔力を持った動物では無く、魔道士を狙うしかない。
だがこの状況で魔道士を狙うには不確定要素が多い。
「……仕方が無いわね。奥の手を使うわ」
「！摩理、何かいい案があるのか！？」
飛びつくシグナム。
「簡単よ、完全完成ギリギリの魔力を私から蒐集すればいいわ」
それははやて以外の全員が心のどこかで考えていた事だ。摩理の魔力量は同化していない状態でも、なのはと同等か少し上くらいはある。
同化をすれば確実にこの中で一番の魔力量を誇る。
シグナムとなのはは知っているが、摩理がロッテとアリアと戦っていた時の魔力量は大雑把に見てもＳＳＳランクは確実にある。

それだけの魔力があれば、闇の書を完成させる事は出来る。
だが同時に高いリスクを負う事になる。最大戦力であり、肝心かなめの摩理から蒐集する事による戦力ダウン。
そして摩理の魔力資質を蒐集する事によって、闇の書が摩理の魔法を習得し、摩理の切り札に対抗する手段を得る可能性だ。
「リスクは承知よ。でも今はそれ以外に闇の書の完成手段は無いわ」
結局摩理に押し切られる形で、摩理のプランが実行される事となった。
摩理とフェイトの回復を考え、五日後闇の書の完成を実行する事となる。
だが摩理の魔力を蒐集した事により、誰にも予想のつかない結末が訪れる事になるとはこのときは誰も知らない。

第十二話　真実　　後編（後書き）

後編のくせに、ずいぶんと間が空いてしまいました。反省です。
さて次回はＶＳ闇の書になります。原作とは違う展開を目指して頑張っていきます。

第十二話　異変

五日後、八神家一同となのは達は摩理と守護騎士が初めて蒐集を行った無人世界に来ていた。
この五日間で摩理とフェイトはシャマルの回復魔法の力を借り、ほぼリンカーコアを回復させる事が出来た。
それでもん万全とはいえない状況だが、今はそんな事を言える状況ではない。
なのはは家に友達の家に泊まると言って、この五日間過ごしたがその言い訳も限界。管理局も捜索している現状では、今この瞬間以外に計画実行のチャンスは無い。
皆がこれから起きる戦いに緊張する中、摩理が最後の蒐集対象を捕えてきた。
「ん～この目で見てもいまいち信じれれへん。摩理ってホンマでたらめやな～」
はやては先程の摩理の戦闘光景を思い出す。
摩理は同化を行うと、素手で虎に似た生き物を一撃でノックダウン。
その光景に見慣れた守護騎士達はともかく、なのはやフェイト、アルフも唖然としていた。
「はやて。摩理の出鱈目さはシャレになんねーよ。この程度で驚いていたら一緒に戦えねえし」
もはや見慣れたヴィータは溜息交じりに言う。
「にゃははは。摩理ちゃん凄い」
「ホントに凄いな摩理は。私も魔法無しであれは出来ないよ」
「全く。て言うか本当に出鱈目だね」
なのは、フェイト、アルフも呆れたように摩理を見る。
「別にこの程度は大したことは無いわ。それよりみんな自分の役割は頭に叩き込んであるわね？」

全員が頷く。摩理の作戦では暴走した闇の書を相対する場合、前衛をシグナムと摩理が務め、中衛がヴィータ、フェイト、アルフが務める。
後衛が、なのは、シャマル。そして防御がザフィーラの布陣だ。
そしてこの戦いはまだ前哨戦。この後の暴走プログラムとの戦いも控える為、カートリッジと魔力を消耗は極力抑える作戦が組まれた。
「この戦いはあくまで、はやてとリインフォースが暴走部分を切り離すまでの時間稼ぎ。無理はせず牽制と防御を中心に行くわ。みんなもいいわね」
摩理の言葉に全員が頷く。
「そしてはやて、リインフォース。貴方達二人がどれだけ早く作業を終えるかによって、今後の展開が大きく違うわ。あまり言いたくは無いけどなるべく早く帰ってきてね」
「まかしとき！すぐ戻ってくるよ」
はやてはそう言うと、親指を立てて笑顔を向ける。
「皆もあまり無理をしないように」
リインフォースもそう言うとはやてと共に蒐集対象のそばに向かった。
最後の蒐集ははやてが自分の手で行う。はやてが最初に言い出した時は、全員あまりいい顔をしなかったが、はやての最後は自分の手できっちりと終わらせたいという言葉に全員が折れた。
「……ごめんな。闇の書、蒐集！」
はやての言葉と同時に虎もどきからリンカーコアが抜き取られ、闇の書が完成する。
完成と同時に闇の書から光が漏れ、はやてとリインフォースを包み込む。
光が晴れそこにいたのは、リインフォースに似た誰かだ。
漆黒の衣をまとい、こちらを刺すような視線でこちらを見るリインフォースモドキ。

「さて、行くわよみんな」
摩理の言葉が戦闘開始の合図となった。

「紫電一閃」
「ラケーテンハンマー」
シグナム・ヴィータの一撃を受け止める、リインフォースモドキ。
だが動きを止めた瞬間を狙い撃つように、
「アクセルシューター」
「プラズマランサー」
なのは・フェイトの射撃魔法が襲う。瞬時に退避するシグナムとヴィータ。
だが……
「盾」
リインフォースモドキは簡単にそれらを防ぐ。
「にゃはは。いくらなんでも防御堅すぎだよ」
なのはは乾いた笑みを浮かべる。
「ああ全くだ。接近も含め私達の攻撃をことごとく防御しきる能力。厄介きわまりない」
シグナムも呆れたようにつぶやく。
そう、戦闘開始から二十分を経過ししているがいまだに、あのリインフォースモドキの防御を破る事は出来ていなかった。
そのくせ、向こうは攻撃し放題。しかも先程などなのはから蒐集したデータを基にして作られた、スターライトブレイカー広域バージョンを全員で防御したせいで、魔力・体力共にかなり削られている。
「て言うか、高町なのは！あのスターライトブレイカーってなんだよ！！むちゃくちゃ防御しずれーぞ！！」
「にゃ！？ヴィータちゃん！？そんなこと言われても……」

「確かに、あれでかなり魔力を削られた」
ザフィーラも苦しい声でヴィータに同意する。
「うん。なのはのスターライトは防御の上からでも堕とされるから……」
フェイトも自分の経験からそう言うと、
「フェイトちゃんも！？ひどいよ！」
涙を浮かべるなのはだった。
「みんな意外に余裕があるみたいで安心したわ。でもお喋りしてるとまた、なのはのスターライトを撃たれるわ。なるべくチャージの時間を与えないようにしましょう」
全員が少なからず疲労している中、妙に余裕な摩理。
「……摩理。お前、実はかなり余裕あるだろ」
「ええ、そうね。まだまだ余裕があるわ」
「だー！！だったらもう少し本気出せよ！あたしらみんな結構本気だぞ！！」
摩理の余裕な態度に、癇癪を起こすヴィータ。その様子にやや困ったように摩理も表情を曇らせる。
「摩理ちゃん。確かに摩理ちゃんの能力が最後の決め手だけどここで負けたら、最後も何もないわよ」
シャマルもこの状況でかなり疲労しているのだろう。ヴィータに同意した。
「……そうね。出来れば私がもっと前に出られればいいと思うわ。でも駄目よ。はやてを人質に取られているわ」
「！？どう言う事だ」
今まで冷静にしていたシグナムが、表情を厳しくして訊ねた。他の皆も程度の差はあれ同様に表情が厳しくなる。
「そうね。私も気の所為だと最初は思ったわ。でも何度か攻撃して確信したわ。あのリインフォースモドキ。私の力を知っているわ」
「それは、そうよ。摩理ちゃんも蒐集されたんだから」
「言い方が悪かったわ。あの子、私の詳細なデータを持っている。

多分私が攻撃する時だけ、障壁の強度を防げるギリギリまで落としているわ」
「はぁ！？そんなことしてアイツに何の得があんだよ」
「多分警告ね。もしお前が少しでも力を加えたなら、はやてを道ずれに死んでやるとでも言いたいのかしら？」
「……だとすれば、あれはかなり摩理を警戒しているのだろうな」
ザフィーラは難しい表情でそう言う。摩理も同意見だ。だが……
「そこが判らないのよ。私を警戒する。そこまではいいわ。だったらもっと私に集中攻撃をしようとする筈よ。でもあのリインフォースモドキは明らかにみんなを狙っているわ。いえ、こう言いかえるべきね。みんなの魔力と体力を削る為に戦っているように見えるわ」
「「「「「「！！」」」」」」」」
摩理の推測に、全員が驚く。確かに結果を見ればそうだろう。摩理以外の全員が僅かながらに手傷を負い、体力、魔力を消耗している。
しかし摩理はほぼ無傷。しかも魔力の消耗もそれほどでもない。
あのリインフォースモドキが摩理を脅威に考えるなら、摩理の力を有利な今のうちに削ぐ事を考えるだろう。
だが現状は逆。最高戦力の摩理を温存させ、それ以外の人間の戦力を削ごうとしている。
その意味は……
「じゃあ、なにさ。あいつはあたしら全員を倒した後に、摩理と全力でやりあおうとか考えてるとか言うつもりかい？」
アルフはどこか納得いかないように自らの考えを言う。
だが誰もそれを否定しない。
「うちのバトルマニアのシグナムじゃねーんだ。そんなこと考えるわけねーだろ！大体アイツは暴走するだけのプログラムだろ？そんなこと考えるわけーし」
「でもヴィータ。貴方達もプログラムなのよね。だったらあの子に意思が芽生えても不思議は無いわ」

「……確かに摩理の言う事は理解できる。だが、何故今回なのだ？今回闇の書の主である主はやてがやさしい主である事以外、特に変わった事は無かった。暴走プログラムに意思を芽生えさせるような？イレギュラー？は無かったぞ」
シグナムの何げない言葉。その言葉を聞いて摩理は『それ』に思い至り、蒼白となった。
「どうしたのだ摩理？」
「まさか、そうよ、なんで忘れていたの！私がどういう存在なのかを！！」
摩理は取り乱したように叫んだ。
「え？摩理ちゃんどうしたの？落ち着いて！？」
摩理の突然の取り乱しように慌てるなのは。
「どうしたんだ摩理！！いつも冷静なお前らしくない」
「解ったのよ。いいえ、解っていたはずなのに忘れていた。はやてや貴方達との生活が楽しくて。一人で戦う事無く、仲間と共に闘うことが嬉しくて。自分が闘う事で大切な人を救える事が誇らしくて。なによりここは誰もが私を？花城摩理？と呼んでくれる！！それがたまらなく居心地が良かった！！」
摩理の叫びは誰も理解できなかった。摩理自身、誰にも理解されない事は解っていた、でも叫ばずにはいられなかった。
「ここにいる筈の無い私が！！？バグ？である私が！！そんな私のリンカーコアを蒐集して何の？バグ？も起きないはず無い！！先生が言うとおり、私が、？バグ？である私が、何かを変えようとするなら、必ずそれを正そうとする者が現れる！！そうなんでしょ！！」
摩理の最後の叫びはリインフォースモドキに向けられていた。そして……
「……やっと、やっと気づいてくれたね。初めまして、だね？ハンター？花城摩理」
これまで終始無表情だったリインフォースモドキは、まるで無垢な少女のように優しい笑みを浮かべた。

第十四話　目覚めし者

「……馬鹿な。そんな、暴走するだけのプログラムが意思を持っただと！？」
シグナムは驚愕しながら、リインフォースモドキを見つめた。
他の守護騎士も同様に驚愕していた。
当然と言えばある意味当然だろう。あの暴走プログラムは元々は一つでは無く、無数の改編によって偶然生み出されたいわばプログラムの集合体。
継ぎはぎだらけの存在だ。シグナム達の様に意思を持つ下地のあるプログラムでは無い物が意思を持った。そんなイレギュラーな存在をシグナム達はただ見つめる事しかできなかった。
「初めましてだね。ヴォルケンリッターのみんな。私は貴方達が暴走プログラムって呼んでる存在だよ」
「えっと、暴走プログラムさん」
「ん？なに？高町なのはちゃん」
「えっと、その、はやてちゃんは？」
「ああ。夜天の主ね。あれなら私と夜天の書の切り離しを終えて、私から出ようと念話を飛ばしてるよ。もちろん私が妨害してるけどね」
暴走プログラムはまるで、ちょっとした悪戯を話すようにはやての事を話した。
「なッ！はやてを放せ！！」
はやてを閉じ込めていると聞いたヴィータは真っ先に噛みついた。だが
「ヤダ。摩理が私と本気で戦う。貴方達が手を出さないって、約束したら、解放してあげるよ」
「なッ！？なにを訳の分からない事を言っている！！今すぐ主はやてを解放しろ！！さもなくば」

「ん～？どうするの？私ごと主を殺す？出来るの？シグナム」
「ぐッ！！」
思わず激昂に駆られたシグナムだが、はやての命を盾に取られれば何もできなかった。
「なんで君は、摩理と戦いたいの？シグナム達守護騎士やはやてとなら……まだ解る。でも摩理は関係ないはずだよ」
フェイトの問いに暴走プログラムは、少しだけ考え頷く。
「うん。私にとってヴォルケンリッターも夜天の主も興味無い。あ、勿論リインフォースも。でも？ハンター？花城摩理は別。私にとって特別だよ。これが理由かな？」
「訳分かんない事言ってんじゃねーよ！！てめえがあたし達やリインフォースに恨みがあるってんなら幾らでもやってやるし、納得もいく。だけどな、かんけーねぇ摩理やはやてを巻き込むなら容赦しねーぞ！！」
「だーかーらー夜天の主もあんた達、夜天の魔道書の騎士も管理者も興味無いよ。もちろん管理局の魔道士もね。でも摩理は別。摩理は私を？私？にしてくれた。だから確かめたいの。花城摩理が本当に蒐集で知った通りの、私の求める人なのかどうかをね」
暴走プログラムの言っている事は誰にも理解できなかった。だが一つだけ確かな事がある。摩理が暴走プログラムと戦うという事を承諾する。そしてそれに誰も手を出さないと約束する。
それらの条件がそろわない限り、暴走プログラムははやてとリインフォースを解放するつもりは無いという事を。
「いいわ。全力で貴方と戦ってあげる。代わりに今すぐにはやてとリインフォースを解放しなさい。あの二人がいたら私も全力を出せないわ。みんなもいいわね」
摩理の言葉に全員が渋々頷く。本当ならこのような提案を受け入れたくは無いだろが、人質がいる以上選択の余地は無い。
「えへへへ。さすが？ハンター？花城摩理。いいよ。すぐにでも解放してあげる」

そう言うと、暴走プログラムは手をかざした。生まれるのは白い光。
白い光はゆっくりとなのは達の下に辿り着くと、はじけ一人の少女の形となる。
白と黒の騎士甲冑を纏った八神はやてへと。
「は～やっと出られたわ」
「はやて！大丈夫？怪我は無い？」
真っ先にはやてに抱きついたのはヴィータだった。
他の面々も嬉しそうにはやてに駆け寄る。
「よかった主はやて。お怪我は？」
「はやてちゃん無事でよかった」
「主はやて、ご無事で」
「よかった、はやてちゃん」
「無事なんだね、はやて」
「お、え、みんないっぺんに言われても困るよ～」
慌てるはやて。だがこの中で一番付き合いの長いはずの摩理だけは、はやてに近寄る事無く暴走プログラムを睨み続けた。
「うん。これで約束は守った事になるよね？じゃあ摩理、戦おうね」
暴走プログラムはそう言うと、周囲に大量の雷の魔力球を作り出す。
フェイトの魔法を改良した魔法。フォトンランサー・ジェノサイドシフトだ。
暴走プログラムがそれを摩理たちに向けて放つ前に、摩理はアリスを振るい、周囲に銀色の鱗粉が吹きあがる。
摩理は吹きあげる鱗粉をまるで階段を駆け上がるように、疾走。暴走プログラムのフォトンランサーと正面から激突した。

「……なぁ、これ、どないな状況？」
完全に現状を理解できないはやては難しい顔で皆に訊ねると、他の皆も困惑の表情を浮かべた。
「……私達もいまいちよくは解らないのですが、暴走プログラムに自我が芽生えたうえ、主はやての命を盾に摩理との決闘を要求し、摩理はそれを受け入れました」
シグナムの簡潔な説明に、はやては眉をひそめた。
「なんで暴走プログラムが摩理と戦いたがるんや？しかも暴走プログラムに自我が芽生えてるって……リインフォースも知とった？」
『……いえ、今、この場であの暴走プログラムを見るまで知りませんでした』
どこか自分自身でさえ、目の前の光景が信じられないような口調で言うリインフォース。
だからこそ疑問が膨らむ。あの暴走プログラムは一体？なにもの？なのか。そして何故摩理との戦いを望むのか？皆の疑問は膨らむ。
そんな疑問が渦巻く中、摩理と暴走プログラムの戦いは激しさを増した。

「はぁぁぁぁ！！」
摩理は空中を疾走しながら、アリスを振るう。アリスから放たれる鱗粉が銀色の刃となって暴走プログラムの障壁に衝突する。
摩理の攻撃を難なく防御してのける暴走プログラムだが、その様子に摩理には焦りが無かった。
（……やっぱり単調な攻撃は通らないわね。でも、この程度なら私の敵では無いわね）
これまでの戦闘で摩理は暴走プログラムについてある程度理解していた。
圧倒的な魔力に、多彩な魔法、強靭な防御。そして、圧倒的な面

攻撃。
並みの魔道士や騎士なら、まず手も足も出ないだろうが、摩理にとってはそれほど苦にはならなかった。
所詮魔道士。摩理の速度には基本追い付けていない上に、摩理の鱗粉による防御もいまだ崩せない。
そして摩理は自身の『全力の攻撃』をあの暴走プログラムが防げるとは思えなかった。
というかそもそも摩理の全力の攻撃を防げる存在に、摩理は今まで出会った事が無い。
生前もそうだが、死後も防げそうな？虫憑き？は数人いたが、彼らと本気で戦う前に戦闘は中断して実際に試す機会は無かった。
摩理の全力を受けても死ななそうな存在にも出会ったが、それを試す機会も無かった。
この世界でも、摩理の全力を耐えそうな存在には遭遇した事がない。
だから摩理はあの暴走プログラムに『全力』の攻撃を叩き込む事に決めた。
摩理は暴走プログラムの攻撃を回避しながら、アリスに力を込める。アリスの表面に刻まれている銀色の模様が輝きを強める。と同時に摩理の体に浮かぶ模様も強い輝きを放つ。
全身が銀色の輝きに包まれた摩理は、一気に暴走プログラムとの距離を取る。そして一直線に暴走プログラムに突撃した。
暴走プログラムはそれを見ると、集中砲火のごとく魔力弾を摩理に向けて解き放つが、摩理を包む鱗粉がそれらを防ぐ。
降り注ぐ魔力弾の嵐を摩理は、一直線に突き進む。魔力弾が直撃しようが摩理の速度は変わらない。むしろ一歩踏み出すごとに速度が速くなっている。
最初は駆け足程度の速度だったが、今はフェイトの全力飛行速度並みだ。
銀色の閃光となった摩理は、自身の加速の勢いとアリスに込めら

れた魔力を全力で暴走プログラムに叩きつける。
さすがの暴走プログラムも今までの防御では、摩理の全力を耐えきれないと判断したのだろう。全ての魔力を防御に回し、摩理の一撃に備えた。
摩理の全力の一撃と、暴走プログラムの全力の防御。その衝突は見えない衝撃となって周囲の空気を震わせる。

「なんとか、命拾いしたね……」
暴走プログラムの体には無数の小さな傷が刻まれていた。その体を引きずるように地面に着地すると、そのまま崩れ落ちそうになる。先程の摩理の一撃。もしあとほんの少しでも防御魔法が弱ければ、確実に消滅されていた。
いやあのままだったら、確実に摩理に消滅させられただろう。暴走プログラムが生き残ったのは小さな偶然だった。
摩理の弾いた魔力弾の一つがたまたま消滅せずに残っていた事、そしてそれに摩理が気付かなかった。
その魔力弾を摩理のアリスに当てる事によって、わずかに軌道をずらす事が出来た。
（あとほんのわずかな時間さえあればいいはずだね。それさえ稼げれば……きっと、摩理は、私は……！？）
ボロボロの暴走プログラの前に無傷の摩理がたたずんでいた。そして一切の躊躇無くアリスを暴走プログラムの胸へと突き刺した。
「これで終わりよ。滅びなさい！」
「……凄く残念だったね摩理。あと『ほんの数秒だけ遅ければ、本当に全部終わらせる事が出来たのにね』」
暴走プログラムの言葉と同時に、摩理の貫いた胸から何かが這い出してきた。

?それ?を見て摩理は茫然とした。そうそれはこの世界に存在する事の無い忌まわしいモノ。かつて摩理が探し求めていた人物が持つ絶望を象徴するモノ。

黒いクマムシ。

クマムシは暴走プログラムの胸から這い出ると、一気に増殖を始めた。摩理はとっさにアリスの力でそれを止めようとするが、遅かった。

無限に増殖しているのでは、と、思える速度で増殖を続けるクマムシ。

クマムシは暴走プログラムの欠損部分を次々と修復し始める。

ただその光景はおぞましかった。

大量のクマムシが暴走プログラムを形作るような光景。

おそらく遠くで見ているはやて達はこれを見て、呆然としているだろう。

摩理自身も何度か見ているが、これはどうしても慣れる事が出来ず未だにおぞましく感じる。

修復を終えたクマムシの群れは、一斉に摩理を見る。

摩理の存在を天敵だと認知したのだろう。一斉に襲い掛かる。

摩理はアリスの鱗粉で防御するが、クマムシはそれさえも喰らう。

普段の摩理ならば、ここは防御では無く、一時離脱し、態勢を整え一気に殲滅する事も出来ただろう。

たとえ相手が?不死の虫?でも……

だが今回は摩理も冷静で無かったことが災いし、とっさの判断を誤った。

そしてもう一つ摩理にとって最悪の事柄が存在した。

（……拙いわね。さっきの一撃に魔力を消耗しすぎたわ。このままじゃあ防御もいつまでも持たない！それに、離脱するタイミングも……）

絶望的な状況の摩理だが、それでも望みは捨てきれなかった。

（……最後の賭けね。私の能力を展開して不死のクマムシを

殺す！！）
摩理はそう決意すると、防御を解き、眠りの鱗粉を解き放った。
眠りの鱗粉に触れクマムシ達が眠り落ちて行くが、クマムシの増殖速度は摩理の？眠りの力？をはるかに超えていた。
（……失敗ね。魔力が残り少なかった事、そして、みんなの力を借りなかった事が、私の敗因かな。……みんなごめんね）
摩理は眠りの鱗粉ごとクマムシの群れに呑みこまれた。

第十四話　目覚めし者（後書き）

パソコントラブル、そしてリアルな事情により更新遅くなりました。読んでくれる人達には本当に申し訳なく思います。

これからはもう少し更新ペースがあげられたらと思います。

闇の書事件編もあと数話で完結を予定しています。その後の展開は未定の部分も多いですが、続くはずですので長くお付き合いできれば幸いです。

第十五話　夢見る者達

摩理がクマムシの群れに呑みこまれる様をはやて達は見ていた。見ている事しかできなかった。誰もが目の前の光景に唖然とし、摩理の援護をする事も出来なかった。

その場に残ったのは、暴走プログラム、クマムシの群れ。そして無残に喰いつかれ、かろうじて原形をとどめているアリスだけだった。

その光景を見て、摩理の生存を期待できるはずもなかった。

はやてはその場に崩れ落ちた。目の前の光景が信じられず、なにも考えない人形のように。

どれ程の時間が経ったのか、はやてには解らなかった。

だが誰かがクマムシと暴走プログラムに対して攻撃を始めた事により、はやての意識も現実に戻ってきた。

初めに攻撃を始めたのが誰かは、はやてには解らなかった。

だがはやてにも解る事があった。

怒りだ。

全員の攻撃にどうしようもない怒りを感じた。

そしてその怒りは、直ぐにはやてにも伝わった。

はやては覚えて間もない魔法を、怒りの命じるまま、暴走プログラムとクマムシの群れに叩き込んだ。

だがクマムシは一向に減らず、暴走プログラムも幾ら攻撃してもクマムシがすぐにその損傷を埋め合わせる。

?不死?を殺す為の悲しい戦いが始まった。

「ここは何処かしら?」

真っ暗な空間に摩理は一人たたずんでいた。
クマムシの群れに呑みこまれ、また死んだと思っていた摩理は少しだけ妙な気分になった。
「何度も死を体験して、また現世に舞い戻る。ある意味私も？不死？ね。でも今回の事は貴女がやったんでしょ？」
摩理は闇に向かって声をかける。
返事は無かった。だが摩理は一人ではなくなっていた。
現れたのは、5、6歳くらいの少女だ。だが摩理はその少女を初対面の相手とは認識していなかった。
「初めまして。それとも久しぶりの方が正解かしら？ねぇ、貴方はどう思う？アリシア」
それがフェイトのオリジナルたる少女アリシア・テスタロッサと摩理の再会だった。

「その、摩理はいつから私ことに気付いていたの？」
「そうね。前から何となくアリシアの存在を感じてたけど、ハッキリと認識したのは蒐集後かしら」
「そっか、なら体の事とか大体わかっちゃった？」
「そうね。解らない事の方が多いと思うわ。でも、大体の事は推測できるわ。今の私の体。本当は貴女の体なんでしょ」
摩理の問いにアリシアはゆっくりと頷いた。
摩理は前々から不思議に思っていた。今の自分の体は一体、誰のモノだろうと。
大体自分の体はとうの昔に無くなっている筈だ。それが存在すること自体在りえない。
なら今の自分の体は、他人の物なのでは。という予測はあった。
時折見るフェイトに似た少女の夢、そしてフェイトに対する妙な心の反応から見て、摩理はこの体がフェイトの身内、多分姉妹だと

推測していた。
それに先日きちんと確認を取っていた。アルフにこっそりこう訊ねたのだ。
「ねぇ、フェイトの亡くなった姉妹って、フェイトそっくりだった？」
アルフは驚愕し、そのことで問い詰められた。だが摩理はそのアルフの問いは上手くはぐらかし、逆に自分の知りたい情報をうまくアルフから聞き出すことに成功し、おおむねアリシアの事を知る事が出来た。
もっとも、まさかアリシアが闇の書の魔力蒐集時に、一緒に蒐集されてしまったことには驚いた。
「……今の私は一種の情報だけ存在なの。だから闇の書も摩理の魔力情報と私の区別がつかなかったんだよ」
アリシアはそう言うと、蒐集されてからの事を話し始めた。
最初は何もできなかったが、摩理から蒐集したデータを闇の書が自身に適合し始めてから、闇の書に異変が起きた。
摩理の魔法。正確に言えば、アリスの能力は闇の書の機能を用いても再現は出来なかったが、代わりに摩理の知識にある？虫？はある幾つかの条件を満たせば再現できた。
だが、本来であればそこまでして摩理の記憶にある？虫？を再現するメリットなど無いはずだが、何故か闇の書の暴走プログラムは摩理の記憶の？虫？を再現するために自身を組み変え始めた。
まず一つ夜天の魔道書の切り離し。
もともと闇の書の元となった夜天の魔道書はベルカ式で魔法を使うことを前提に作られているので、？虫？の力を行使するにはむしろ邪魔となる。
なので闇の書の暴走プログラムは夜天の魔道書の機能を完全に捨てる事にした。
そして新たなる管理者。
今の管理者はあくまで疑似的に作られた感情を持つプログラム。

人間のように自ら?夢?を思い描く事は無い。
そこで目をつけたのが、偶然蒐集したアリシアの意識だった。
アリシアの意識を管理者にする事によって、?夢?を原動力とする?虫?の制御をおこなえる。
そして最後の問題が、使用者だった。
摩理から蒐集した知識だけでは完全ではない。なので闇の書の暴走プログラムは最初の主を摩理にする事に決めた。?虫?に対する唯一の情報源にして、多くの知識を持ち、そして存在その物が?バグ?である『花城　摩理』を求めた。
「でもね、あたしは摩理にそんな物を押しつけたくなかった。だから闇の書と一緒に死のうとした。でも、駄目だった。闇の書の暴走プログラムは摩理を求めていて中途半端な干渉も効かなかった。だから私は闇の書の暴走プログラムの意識とシンクロさせて行動を微妙に捻じ曲げて、摩理に闇の書の暴走プログラムごと私を殺してもらうはずだった。
でもそれを感じた闇の書の暴走プログラムが不完全だけど一匹の虫を再現したの」
「……?不死の虫?あのクマムシね」
「うん。私も全力で抑えたよ。でもあと数秒で一時的に機能を凍結出来る筈だった。でも」
「……その前に私が止めを刺してしまったのね」
摩理は少し沈んだ。
いくら知らなかったとはいえ、アリシアの頑張りを台無しにしてしまったのだ。ショックは隠せない。
「うん。でもあれは仕方が無いよ。摩理は何も知らなかったし、私も何も言わなかったから……」
「ふふ。そう言ってくれると、私も少しだけ気が楽になるわ」
摩理は微笑を浮かべたがすぐに表情を改めた。
「それで今の状況は?」
「うん。闇の書の暴走プログラムは摩理を取り込んだけど、でも今

すぐには動けないの。摩理の眠りの力の所為で」
「そう。なら今なら私とアリシアで闇の書の暴走プログラムに干渉できるのかしら？」
「え？出来るよ。でも！それには摩理が闇の書の主になるってことだよ。また？夢？を食べられるんだよ！！」
「アリシア。『私達』を勘違いしないで。私は？虫憑き？なのよ。？虫憑き？が夢を食べられるのは当たりまえ。その痛みは『私達』がよく知っているわ。でもその程度の痛みで私達が？自分の夢をあきらめると思っているの？！！」
「！？それは、でも！！」
「それにね。今の私の夢は誰にも食べきれないわ。はやてや、みんながここにいる限り、今の私の夢『大切な人達と共に生きる』って夢を食べきれるはずが無いわ」
　摩理の微笑と共に語られた夢に、アリシアは必死に反論した。
「！！そ、それはそうかもしれないけど…でももし夢を食い尽くされたら、死んじゃうかもしれないのに！！」
「大丈夫よ。だって貴女の夢も今の私の夢と似ているんでしょ？だったら、なおさら闇の書の暴走プログラムでも食べきれるはずが無いわ！だって私達二人の？夢？よ」
「……」
　摩理の確信に満ちた宣言に、アリシアは何も言えない。おそらく摩理なら闇の書の制御に成功するだろう。という確信もあるが、どうしてもアリシアはすぐに首を縦に振る事が出来なかった。
　摩理の記憶から見た虫憑きの最後。
　それはどれもが、悲しい終わり方だった。得に摩理自身の記憶ではないが『モルフォチョウが残した記録』にある、『流星群の夜』の結末にはアリシアは絶句し、自然と涙をこぼした。
　だからこそアリシアは思うのだ。今の闇の書をこのまま世に出してはいけないと。
　今の闇の書は暴走すれば、まず間違いなくこれまで以上に多くの

未来を奪う。
摩理なら制御できるだろうが、あんな物をたった一人の人間に押し付ける事が正しいとはアリシアには思えなかったが、他に選択肢は無く、結局首を縦に振った。

「……これが、闇の書のコアね」
そこには無色透明の球体が静かに浮かんでいた。
「うん。今までの闇の書のコアには闇の書に関わった人達の怨念が纏わりついてたけど、今はあの？クマムシ？が怨念を取り込んで外で暴れているから、今のコアはほとんど純粋な存在だよ」
アリシアの説明を聞いた摩理はゆっくりとコア近づき、そっと手を触れた。
瞬間、コアは激しく発光し、摩理の意識を乗っ取ろうと干渉を始めた。
「ッ！！」
コアの精神干渉と共に摩理の心に空洞が生まれる。その感覚を摩理は知っていた。
？夢？をコアに喰われているのだ。
久しぶりの？夢？を食われる感覚に、摩理は一瞬膝をつきそうになるが、摩理はこらえ、コアを直視しながらコアに語りかけた。
「……アナタは、何故？虫？の力を求めるの？」
摩理の問いかけにコアの発光が弱まる。それと同時に摩理への精神干渉と？夢？を食われる感覚も弱まる。
さらに摩理はコアに問いかける。
「アナタの望みは？本当にアナタが望むのは一体なに？」
摩理の問いかけにコアは、なかなか答えなかったが、小さな声で

答えが返ってきた。
『……私は、？私？になりたい』
コアはゆっくりと自らの望みを口にした。
コアの望みを聞いた摩理は自分からは何も言わず、かつて亜梨子が摩理にそうしてくれたように、コアが自分から話してくれるのを待った。
どれくらいの時間がたったのか？夢？を食われている摩理には解らなかったが、やがてコアは躊躇いながらも話し始めた。
『……私はいままで様々な人達が、夜天の魔道書を自分の都合のいい道具にする為に加えたプログラムの集合体だった。意識なんて無かったし、主や管理者、守護騎士達も私にとっては近くにいるだけの無関係な存在だった。私は集められた醜いヒトの欲望を実行するだけの存在。でも、貴女のリンカーコアに接触して思ってしまった。気の遠くなる長い年月の中で私は、ヒトの歪んだ欲望をただ実行するだけの存在で無く、誰かに必要とされる？私？になりたいって事に気付いたの』
コアの告白に摩理はなにも言わずただ耳を傾ける。
『そして摩理の記録の中から、？虫？を知った。？虫？は宿主に忌み嫌われているけど、それでも宿主と共にあり続けて唯一無二の存在あり続けられる。だから私も……』
「そう。それがアナタの？夢？なのね」
『え？？夢？？だって私は人間じゃないのに……』
「関係が無いわ。それに記録程度を見て虫憑きを理解したつもりにならない方がいいわ。虫憑きの？夢？は願った本人とって、どんな事をしても、どんなに挫けそうになっても、どんなに辛い思いをしても、それでも諦めきれない願いの事よ」
摩理の語る虫憑きという存在に、コアは勿論、傍らで様子を見ていたアリシアもなにも言えない。
「アナタの願いも、きっとそうなんでしょ？どんなに苦しくても、難しくても、それでも諦めきれない願い。だからアナタは本来存在

しない存在を具現化できた。ならアナタの願いは、虫憑きが抱く？夢？と変わらないわ」
摩理は優しく微笑みながら、さらに言葉を重ねる。
「だからアナタの？夢？を私達に聞かせて」
『私の……私の？夢？は『誰かに必要とされる私であり続けたい』』
「良い？夢？ね。なら私が、アナタのマスターとして在り続け、必要とし続けるわ！私の？夢？『大切な人達と共に生きる』。私が？夢？を持ち続ける限り、ずっと……
アリシアも一緒よ。いいわよね？」
「勿論だよ！摩理」
『……解りました。改めてこれから末永く私をお願いするね。？ハンター？うんん、マスター花城摩理』
二人の同意を得られた事により、コアに変化が起きた。無色透明な球体が一冊の本へと変化する。
白と銀で装飾され、表紙には今は存在しない摩理の？虫？を思わせる銀色のモルフォチョウが描かれた魔道書に。
『マスターさっそく私に名を授けてください。新たな？私？の存在を表す名を』
コアにそう言われると、摩理は少しだけ困った顔をした。
「……名前をつけるなんて初めてだから、いい名前かどうかわからないけど、それでもいいかしら？」
摩理はそう前置きすると、コアの新たな名を口にした。
「『夢の書』……私達、虫憑きの夢を理解し具現化するモノ。だから夢の書よ」
摩理がそう言うと、コア。いや夢の書は静かに摩理のすぐ傍まで浮遊し近づいてきただけで、なにも言わなかった。
摩理は名前が気に入らなかったのかと思ったが、隣にいたアリシアが忍び笑いをしながら、小さな声でそっと摩理に耳打ちしてきた。
「きっと照れてるんだよ。声に出したら摩理にそのことがバレるか

ら黙ってるだけだよ」
小さな声にもかかわらず、夢の書はアリシアの言葉を聞いたのだろう。無言で自らの体をアリシアの頭に叩きつけてきた。
「い、痛いよ！夢の書！！」
涙目になりながら不満を言うアリシアに、どこか怒っているように見える夢の書を摩理はどこか微笑ましく見守っていた。
だが突然摩理の表情が一転した。その表情は？ハンター？のモノだ。
「二人とも、準備して。何か来たわ」
摩理の言葉だけではなく、周囲に張りつめる気配に、先程までどこかふざけ合っていたアリシアと夢の書の雰囲気が変わった。そして、
「『イエス。マスター』」
声を揃えて摩理に従う。

周囲を警戒する摩理の視線に飛び込んできたのは、黒い？不死？のクマムシの群れだ。
「……どうしてここにも、？不死？の虫が？」
「多分、夢の書が摩理を主に認めたから、闇の書に込められた怨念が摩理を完全に閉じ込めて、力だけを奪おうとか思っての行動かな？」
『……それだけじゃないよ。摩理は自分を滅ぼせる力を持ってる事を本能で理解してる。いわば怨念の防衛本能だね』
アリシアと夢の書の推測に、摩理は嗤った。
「ふふふ。ずいぶん警戒されたものね。でも、私はもう何処かに閉じ込められるのはウンザリなの！！それともう一つ。今の私達を止めるには、この程度では足りないわ！！」
摩理はそう言い放つと、夢の書に手をかざした。
今の摩理の手にはアリスが無い。頼れるのは夢の書とアリシアだけ。だから、摩理は一切の躊躇い無く二人の力を信頼した。
かざした手から、夢の書の能力。そしてアリシアの役割を理解し

て、思わず苦笑した。
「これは……少しだけズルイわね。でも……凄く嬉しいわ！！夢の書！ダウンロード！？ハルキヨ？！！」
瞬間、夢の書がものすごい勢いでページをめくり、ある項目で止まると同時に、アリシアが紅蓮の業火に包まれる。
炎に包まれたアリシアだが、次の瞬間、炎の中にアリシアの姿は無く。代わりに一匹の？虫？が存在した。
紅蓮の業火その物だと思わせる炎に包まれた？オオエンマハンミョウ？
？オオエンマハンミョウ？が摩理の周囲をグルリと回っただけで、周囲が一瞬で紅蓮の業火に包まれる。
その光景はまさに灼熱地獄を思わせる。
かつて摩理が出会った、最強の虫憑きの一人？ハルキヨ？の能力を夢の書を使って再現したのだ。
摩理自身この光景に少し驚いた。夢の書が虫の能力を再現できる事は、手をかざした時点で理解したが、まさかオリジナルとほぼ同じレベルにまで再現されるとは思わなかった。
「……訂正するわ。この力、反則ね。でも、まあいいわ。ここから出るには丁度いいわね」
摩理はそう言うと、ある？虫憑き？の項目を探す。
探していた項目はすぐに見つかったが摩理はすぐには、ダウンロードしなかった。
その人は摩理にとって一言では言い表せない関係にあった人物であり、摩理と亜梨子の恩人でもあり、最初から最後まで摩理の存在を信じてくれた人であり、そして、摩理とよく似ているけど少しだけ優しい人だ。
だからその人の力を使うのは嬉しくもあり、頼もしくもあり、そして懐かしい。
摩理はその人の名に恥じないように、声を高らかに？最強の悪魔？の名を口にする。

「ダウンロード！？かっこう・薬屋　大助？」
その瞬間、周囲を灼熱地獄に変えた？オオエンマハンミョウ？は姿を消し、代わりに緑色の異様に触覚の長い？かっこう虫？が摩理の肩に止まる。
？かっこう虫？はしばし全く動かなかったが、突然、声無き声で鳴くと、今まで纏っていた？ハンター？の装備が再現されたバリアジャケットが、ベルトが幾つも付いた漆黒のロングコートに軟金属製のブーツ。手には革製の手袋。そして顔を隠すほど大きなゴーグルへと変化した。
「え？これは……」
困惑した声を上げる摩理。摩理もさすがにこれは予想外だった。
摩理の今纏っているバリアジャケットの形状は、彼、？かっこう？の戦闘時の装備と同じだ。
予想外の事態に摩理は混乱しそうになるが、いつの間にか手に何か握っている事に気付き、握っているモノを見て驚いた。
大型の自動拳銃。これも？かっこう？が使っていた装備だ。
混乱する摩理をよそに、？かっこう虫？は自動拳銃に舞い降り、その身を自動拳銃へと沈める。一瞬で？かっこう虫？が銃身に同化した異形の銃へと変化し、さらに銃から無数の触手が伸び摩理に絡みつく。
摩理がアリスと同化した際に浮かぶ模様に凄くよく似た緑色の模様が全身に浮かんだ。
「……ふふふ。さすがにこれはサービスのし過ぎじゃないかしら？でもこれで完全に負けられなくなったわ！彼は、薬屋大助さんは、たかが怨念如きに負ける事なんて絶対無いわ！！さあ見せてあげるわ！最強の悪魔の力を！！」
摩理はそう言い放つと、？かっこう虫？が同化した銃を？クマムシ？の群れに向け、発砲した。
拳銃から放たれたとは思えない砲撃音と共に放たれた銃弾が、？クマムシ？の群れごと空間を打ち抜いた。

第十五話　夢見る者達（後書き）

ハイ、いろいろ勢いでやってしまった今回です。
冗談抜きで摩理さん無双＆チートモードになっています。まず間違いなくはやて以上の生きたロストロギアですね。
さて次回は闇の書の暴走プログラム＆?クマムシ?の殲滅タイムです。ムシウタ・バグでは殲滅できなかった不死の?クマムシ?を殲滅して御覧に入れます。

第十六話　怨念の終わり　前編

八神はやては目の前に広がる光景を見て、ただ絶望する事しかできなかった。
見渡し限りの黒。
数えるのも馬鹿らしいクマムシの群れだ。
そしてそのクマムシをまるで女王のごとく従えるリインフォースと同じ姿をした、暴走プログラム。
その姿は戦闘開始から全く変化が無い。
どれだけ強力な魔力ダメージを与えても、たとえシグナムやヴィータが直接デバイスを叩きつけても、次の瞬間にはまるで何事も無かったかのようにクマムシがダメージを修復する。
一度なのはとフェイト、はやての三人の最強砲撃魔法でクマムシごと暴走プログラムを倒そうとしたが、結果は失敗した。
だがある意味では成功したともいえる。なにせ三人の「トリプルブレイカー（殺傷指定バージョン）」は、暴走プログラムは勿論、クマムシの群れさえもまとめて殲滅したのだ。
はやては勿論、全員が？勝った？と思った瞬間、それが起こったのだ。
空中を漂うチリから無数のクマムシが現れ、わずか数秒で暴走プログラムを再生させた。
その光景ははやて達にとっては悪夢以外の何物でも無く、この時から全員が？不死？という名の絶望に心を折られ始めた。

そして現在はやて達の状況は、カートリッジも尽き、皆体にそれなりのダメージを受けている。特にザフィーラは何度も体をクマムシに喰らいつかれ、至る所から出血し、今はシャマルに治療を受けている。
他の皆はもはや攻撃に魔力を割く事も出来ず、シャマルとザフィ

ーラ以外の全員で防御魔法を応用した防御結界を構築し、クマムシの猛攻をかろうじて防いでいる。
この場で誰もが言わないが、皆口に出さないだけで理解している。もう勝てない。今の自分達の行動はただの時間稼ぎだと。
実際クマムシ達はこの防御結界の魔力を少しずつ喰らっている。おそらく後十分は持つかも知れない。
それが今の状況だ。どんな楽天家の人間でもこの現状でたとえ部の悪い賭けでも、起死回生の手は浮かばないだろう。
「……主はやて。お話があります」
「？なんやシグナム。もしかして何かいい考えでもあるんか？」
シグナムの重苦しい言葉に、あえてはやては気楽そうな調子で答える。
何となく、シグナムのこれから口にする言葉ははやてにとって嫌な結末をもたらすと、はやての本能が訴えるからだ。
「主はやて。お逃げください。高町とテスタロッサ。アルフを連れてこの場から、いえ、この世界から逃げてください」
「……シグナム達は？」
「……この場で主達が逃げるまでの時間を稼ぎます」
「嫌や！！なんでシグナム達を置いて私らだけ逃げるんや！！」
シグナムの言葉を聞いてはやては激昂した。それだけはやてにとってシグナムの提案は受け入れがたいものなのだ。
はやてにとってシグナム達は家族だ。つい先ほど摩理を失ったから、はやては何も考えられず、ただ怒りにまかせ、暴走プログラムと戦った。
そのはやてが家族を見捨てる選択をする筈が無い。
「冷静に考えてください。この場で我々ヴォルケンリッターに主はやてをお守りし、自らをも生還する術は……ありません」
シグナムの言う残酷な現実に、はやては他の守護騎士達を見る。
シャマルもヴィータもそして、負傷しているザフィーラもはやてから逃げるように視線をそらす。

その行為がシグナムの意見を肯定している証拠だった。
「リインフォースからも言って！そないな事駄目だって！」
『……主はやて。私も将達の意見に賛成です。そして私も残るつもりです。将達だけでは主はやて達が離脱するまでの時間を稼ぐのも厳しい筈ですから』
ユニゾンしたリインフォースもシグナも達同様に残る事を言うと、はやてはその場に崩れ落ちる。
「シグナム！本当にそれしか方法は無いんですか？！」
「そうだよ！きっと、まだ何とかする方法が！」
フェイト、なのはもシグナム達の提案が受け入れられないのだろう。必死な表情でシグナム達に詰め寄るが、
「気持ちはありがたいが、無理だ。貴様との決着どうやら付けられそうにないな、テスタロッサ」
「ま、気持だけ受けっとくよ。高町なのは」
「はやてちゃんを宜しくね。なのはちゃん。テスタロッサちゃん」
「すまん」
守護騎士達の決意を込めた別れの言葉で、なのはもフェイトもどうしようもない事を悟った。だが理論的には納得できても、感情では納得できなかった。なのはとフェイトはそれでも説得しようとするが、
「アルフよろしく頼む」
「……分かった」
アルフが転移魔法の準備をし始めと事で、いくら言葉を重ねても無駄だという事を理解した。
「主はやて顔を上げてください」
ユニゾンを解き、人間モードに戻ったリインフォースが膝をつき、はやての目線に合わせ微笑む。
「我々は最後に主はやてに仕えられた事を、そして主はやてを守れる事を。これほど幸せを与えられた事を消して忘れません。主はやて幸せになってください」

「い、嫌や。みんな、私を一人に、嫌や」
涙を流しながら必死に、引き留めようとするはやてに、リインフォースと守護騎士達は困った表情を浮かべるが、はやてを説得する言葉を彼らは持っていなかった。
それでも何とかはやてを納得させようと口を開こうとした瞬間、絶望は彼女達をさらに追い詰める。
「な！？結界が！！」
今までクマムシの猛攻を防いでいた結界に亀裂が入った。その亀裂目がけ先程までの猛攻以上にクマムシが突撃し、結界を喰らう。
「アルフ！まだか！？このままでは結界が食い破られる！！」
「もう、少しだけ、あとほんのもう少しだからさ」
アルフは必死で詠唱するが、本来転移魔法はそれなりに高等魔法だ。
この切羽詰まった状況でいきなりと言われても、そう簡単でない事は皆が知っていた。
そして焦る皆を、最悪の絶望がさらなる絶望を与える。
「なっ！？結界が！！」
慌てて亀裂の入った結界を補修していたシグナム達だったが、目の前の亀裂に集中したため他の部分が疎かとなり、結界のほかの場所にできた亀裂を見過ごし、そこからクマムシ達は結界を破壊した。
そしてその亀裂ははやてのすぐそばだった。
「主はやて！！」
真っ先に気付いたのはリインフォースだった。今まさにはやてに喰らいつこうとするクマムシから、はやてを守ろうと、動くリインフォースだが、時間が足りなかった。
あと数秒あれば最悪はやてを守る盾にもなれたが、間に合わない。
その現実がリインフォースを絶望させた。

目の前に迫るクマムシに、はやては何もできなかった。
魔法で迎撃する事も、防ぐ事も。
その事にはやてはどこか安堵した。これで一人で無くなる。死んだとしても、そこには両親がいる。摩理もいる。そして守護騎士達も。
その事が迫りくる死に対してはやてを安堵させた。
だがはやてが諦めた瞬間、はやての頭上にすさまじい衝撃が走った。
「必殺、亜梨子ハンマー！！」
という名のゲンコツが、はやての脳天に衝撃を与える。
「な！？あんた誰や！というか、ここ何処や！？」
そこは先程までいた結界内部では無く、なにも無い空間だった。
混乱するはやてを無視し、先程拳骨を喰らわせた人物が怒鳴りつける。
「そんな事はどうでもいいわ！それよりアナタ、今諦めたでしょ！！」
はやては改めてその人物を見る。長い髪をポニィテールにし、小柄ながらも雰囲気から年上。多分中学生くらいだろう。快活なイメージを連想させる女の子だ。
「……そうや。私らにはもう、どうしようもない。せやから……」
「どうして諦めるの！？アナタには？夢？が無いの？如何しても諦めきれない願いは無いの？それを諦めるの？」
「あるよ。でも、もうその願いはかなわへん！摩理が、摩理が死んだ時点で私の？夢？は…」
はやては涙を流しそう言うと、ポニィテールの少女は
「摩理は生きているわ。そしてあなた達の元に戻ってくるわ」
「嘘や！だって摩理は！」
「嘘じゃないわ。だって摩理は、私との約束も守ったわ。だからあなたも諦めては駄目よ」
ポニィテールの少女の自信に満ちた言葉にはやては驚いた。そし

てこの少女は摩理の事を自分以上に信頼している。
「……あんた、なんでそんなに自信満々に言いきれるんや？」
「だって私は摩理の親友よ。たとえどんなに離れてもその事は変わらないわ。それに私も摩理もワガママなのよ。だからきっと、摩理は新しい？夢？を叶える為に貴方達の元に戻ってくるわ」
摩理の親友。その言葉にはやては驚いた。摩理は今まで自分自身の事をあまり話してくれなかった。
だが一度だけ聞いた事があった。摩理には親友がいる。
もう会えないけど、摩理にとってはとても大事な親友だと、摩理は嬉しそうに話してくれた事をはやては覚えている。
「アンタ、もしかして、一之黒　亜梨子、さん？摩理が話してくれた、大事な親友って言ってた」
「そっか。摩理は私の事もきちんと覚えていてくれたのね。なら安心だわ。はやて。摩理の事よろしくね」
亜梨子の言葉と同時にはやての意識は現実に引き戻され始める。
最後に亜梨子ははやてに微笑みながら、
「大丈夫よ。摩理はとても強いわ。きっと貴方達を襲う絶望にも負けないわ。だって、摩理の？夢？も私達の？夢？も繋がっているから……」
そう言うと、はやての意識は完全に現実へと戻された。

「！！主はやて！気がつきましたか！」
リインフォースやなのは、フェイト。守護騎士の面々が心配そうにはやてを覗き込んでいた。
「私は、どうしたんや？」
「はい。結界が破壊され、主はやてに一匹のクマムシが襲いかかった瞬間までは覚えていますか？」
「うん。覚えとるよ。リインフォースが助けてくれたんか？」

まだ意識がぼんやりするはやては、リインフォースが助けてくれたのかと思ったが、リインフォースは首を横に振り、眼下に広がるそれをはやてに見せた。
その光景にはやては絶句した。
目の前にはおそらく地獄を思わせる光景が広がっていた。
黒いクマムシの群れを、紅蓮の業火が呑み込む。
そしてクマムシは業火に焼かれながらも、業火を喰らおうと愚直に直進する。
この光景を地獄と表現する以外、何と表現すればいいのだろう。
そしてこの地獄の光景にたたずむ人の形をした二人の？悪魔？が存在した。
一人はリインフォースと同じ形をしたクマムシを従える女王。暴走プログラム。そしてもう一人、紅蓮の業火の形をした？オオエンマハンミョウ？を従える漆黒のロングコートを纏い、顔全体を隠すかのような大きなゴーグルをつけた人物だ。
ロングコートの人物が口元に冷酷な笑みを浮かべると、？オオエンマハンミョウ？が今までの数倍以上の業火となってクマムシを襲う。
だがクマムシも負けておらず、少しずつ数を減らされているが、それでも？オオエンマハンミョウ？の業火に耐えていた。
その光景に誰もが言葉を失わずにはいられない。魔法でも変換資質を用いて炎を操る魔道士は珍しくない。だがここまで大規模な炎を操る魔道士となると、この広い次元世界に数人いるかどうかだろう。
それだけ圧倒的な炎だ。おそらくあのロングコートの人物は魔道士のランクで表現すればＳＳＳランクは確実だろう。
全員がそう認識し、目の前の光景に圧倒される中、ロングコートの人物は見る者をさらに絶句させる行動をとった。
ロングコートの人物が手をかざすと、今まで全てを燃え盛る勢いでクマムシを焼いていた業火が？オオエンマハンミョウ？と共に嘘

のように消えた。
代わりに一匹の虫がロングコートの人物の肩に止まる。緑色の？かっこう虫？だ。
？かっこう虫？がロングコートの人物の手に持つ拳銃に止まると、同化し、異形の拳銃へと変化する。
そして異形の拳銃から触手がロングコートの人物に絡みつくと、摩理が同化した時に浮かぶ模様と似た緑色の模様が浮かぶ。
「え！？あれって、摩理と同じ……」
「確か同化型って摩理は言っていたけど…」
「ならあの人も摩理ちゃんと同じ魔法を使う、魔道士？」
ロングコートの人物が摩理と同じタイプの魔法を使った事に驚く、はやて、フェイト、なのは。守護騎士達も三人同様に驚くが、ロングコートの人物の行動は全員の度肝を抜いた。
ロングコートの人物は単身クマムシの群れに突っ込み、拳の一撃で、数十匹のクマムシを粉砕する。
勿論クマムシ達もロングコートの人物に襲いかかるが、ロングコート防御力が高いのか、さして大きなダメージは受けていないが、それでもクマムシの攻撃を完全には防げず、少しずつ鮮血が流れるが、ロングコートの人物はまるで自分が傷つく事など、眼中にないと言わんばかりに、拳でクマムシを粉砕しながら、暴走プログラムに向かって真っすぐに直進する。
その進撃の様子はまさに悪魔の行進のように見えた。少なくともその様子を見ていたはやて達にはそう見えた。
ロングコートの人物がある程度暴走プログラムに近づくと、手に持っていた？かっこう虫？が同化した異形の拳銃を構え、発砲。
瞬間、拳銃から放たれたとは思えない、大音響の砲撃音と、その砲撃音に見劣りしない大威力の弾丸が、射線上のクマムシもろとも、暴走プログラムを木っ端微塵に吹き飛ばした。
だが当然の様にクマムシが暴走プログラムを修復する。ロングコートの人物はまるでその事を知っているかのごとく、続けて拳銃を

連射する。
一発一発が、なのはのディバインバスタークラスの砲撃。その砲撃を立て続けに受けても、暴走プログラムはクマムシによって修復される。
その様子はまさに？不死？といえるものだ。
だがその様子にロングコートの人物はさほど動揺せず、拳銃を連射しながら、暴走プログラムとの距離をつめる。
そして至近距離にまで肉薄すると、体に浮かぶ模様が緑色の輝きを増し、ロングコートの人物を中心に凄まじい魔力が放たれる。
手にした拳銃から火花が飛び散りながら放たれる砲撃。先程までとは比べ物にならない一撃に暴走プログラムは勿論、周囲にいたクマムシごとまとめて吹き飛ばされる。
だがその一撃で塵になるほど粉々に砕け散っても、暴走プログラムはクマムシによって修復される。
その様子にさすがのロングコートの人物も舌打ちしたが、それでも攻撃の手を緩めるつもりは無いのだろう。
跳躍し一旦、暴走プログラムとの距離をとると、同化の証である緑色の模様が消え、代わりに巨大な？ナナホシテントウ？が現れ、巨大な羽を広げると同時に空気が圧縮され、翅の羽ばたかせると目に見えない衝撃波が放たれる。
先程の炎の？オオエンマハンミョウ？や？かっこう虫？と同化した銃弾に勝るとも劣らない威力に再び暴走プログラムは塵となるが、それでも死ななかった。
再びクマムシによって再生される暴走プログラムだが、先程までより明らかに再生速度が遅くなっていた。
暴走プログラムの再生速度が遅くなっている事は、遠目から見ていたはやて達も分かった。当然のようにロングコートの人物も気づいているのだろう。数秒だけ思案するようなしぐさを取ると、？ナナホシテントウ？の背に乗ると、羽を広げはやて達元へと飛んだ。

？ナナホシテントウ？と共に現れたロングコートの人物に全員が、デバイスを構え、警戒する。
目の前の人物はたった一人で暴走プログラムを何度も殺した、圧倒的な力を持つ存在だ。一方はやて達は疲弊している。この状況で戦えば万が一にも勝ち目が無い。
全員が緊張の眼差しでロングコートの人物を見ると、何故かロングコートの人物ははやて達の警戒具合に首をかしげる。
「？……どうしてそこまで警戒するのかしら？」
ロングコートの人物の疑問の声に、全員が先程までとは違う意味で驚愕する。
「……摩理なんか？」
「？……ああ、そう言う事ね。確かにゴーグルで顔を隠していたら気付かないわね」
ロングコートの人物、いや摩理は納得いったように頷くと、ゴーグルを外す。
ゴーグルを外してあらわになった素顔。
「！！摩理！本当に生きてたんやな」
はやては涙を浮かべ、真っ先に摩理のもとに駆け付け抱きついた。
摩理は一瞬驚くが、微笑を浮かべながら、最初にはやてが抱きしめてくれたように、優しくはやてを抱きしめた。
他の皆も駆けつけると摩理の無事を喜んだ。
「摩理ちゃん無事で良かったの」
「摩理、無事だったんだね」
「この野郎！無事ならさっさと念話くらいしろよな！」
「摩理ちゃん。心配したのよ」
「本当によかった」
口々に摩理の無事を喜ぶみんなの様子に、摩理は嬉しさと心配をかけた申し訳なさでいっぱいになった。だから摩理は最高の笑顔で、

皆に答える。
「ごめんなさい。そしてありがとう」

第十六話　怨念の終わり　　前編（後書き）

久しぶりの更新です。しかも、前編です。楽しみにしていた方々、本当に済みません。

今回の摩理さんは、一号指定の虫をふんだんに使い、憎きクマムシを追い詰めていましたが、それだけでは足りません。
後編にて、原作キャラと共に、クマムシに引導を渡して見せます。

第十七話　怨念の終わり　後編

みんなが摩理の帰還を喜ぶ中、リインフォースだけがその輪に加わらず、呆然と摩理を見つめていた。
「？どうした、リインフォース？」
「……在りえない。摩理。お前の持っている本は一体何だ！？」
普段ではありえない、リインフォースの混乱した様子に、全員が驚くが、摩理だけはリインフォースの様子に納得し、コートの中にあった夢の書を取り出す。
「やっぱりリインフォースは気付いたのね。これは夢の書よ。そしてあなたの予想通り」
「そうか。その夢の書とやらは、暴走プログラムのコア。夜天の書を、闇の書とした存在なのだな」
「「「「「「「「！？」」」」」」」」」
リインフォースの断定する言葉に、全員が驚く。
「どう言う事だリインフォース！摩理の持つ魔道書が暴走プログラムのコアだと！？では今もクマムシによって再生されているアレはなんだ！！」
思わずリインフォースに粗い口調で訊ねるシグナム。一方訊ねられたリインフォースも、目の前の現象が説明できず、困惑している
「私にも分からない。そもそも私自身、今回の闇の書の変化は理解が及ばない事が多すぎる。だから摩理教えてくれ。その夢の書とは一体何だ？そして今も再生を続けるあれは一体」
「分かったわ。でも今は時間も無いから、簡単に説明させてもらうわ。この夢の書は暴走プログラムが自らを既存の形から全く新しい形へと変化した存在。私の記憶にある？夢？を具現化するわ」
「？夢？？夢を具現化するとは一体どういう事だ？」
「それについては今は時間が無いから説明しきれないわ。そして今もクマムシによって再生を続ける存在。あれも私が知る？夢？のな

れの果て。闇の書に込められた怨念が私の知るあのクマムシを操って暴走している。哀れな存在よ」
「……闇の書に込められた怨念か。コアが無くなっても怨念だけが暴走を続ける。それほどまでに我々は罪深い存在なのだな」
リインフォースのどこか自嘲した言葉に、はやてが怒りの声を上げる。
「何、言ってるやリインフォース！リインフォースや守護騎士のみんなは好きで蒐集してたわけやない。今までの主が命令したせいや！せやからみんなの所為とちゃう！」
「確かにそうね。それに夢の書も自分の存在を変えたがっていたわ。彼女の夢を聞けば貴方達も解るわ」
「？夢？？プログラムが夢など抱くわけが……」
「彼女の？夢？は『誰かに必要とされ続ける自分でありたい』　改変によって生まれた彼女でさえこんな願いを抱くほど、貴方達はつらい目に会ったのよ。それを責める人間は、少なくともここにはいないわ」
摩理の語った元闇の書のコアである夢の書の？夢？を聞いてリインフォースは勿論、守護騎士の面々もはやて達でさえ何も言えなかった。
闇の書の暴走プログラム。その存在を半ば悪だと思っていたが、その暴走プログラムでさえ苦しんでいた事を、皆が気付いたからだ。
「話はここまでよ。今はあの傍迷惑な怨念を止めるのが先よ。と、言いたかったんだけど…」
そう言いながら改めてみんなの状態を確認する摩理。正直みんな限界だ。魔力もそうだが体力、精神的にもこれ以上の戦闘は厳しいだろう
摩理はそう判断すると、先程まで闘っていた地点に手をかざし、
「お願い。来て、アリス！！」
摩理がそう言うと、銀色の閃光が摩理めがけ飛来する。摩理はそれを難なく受け止める。

受け止めたそれはクマムシに食い破られ、度重なる魔法の余波にボロボロに傷ついた摩理のデバイスアリスだ。
摩理は申し訳なさそうにアリスを抱きしめる。
「ごめんねアリス。もう少し頑張ってくれる？」
『イエス、マスター摩理。私を存分にふるってください』
「ありがとう」
摩理はそう言うと、アリスに魔力を流し込む。すると食い破られ損焼失部分が修復され、元の彫刻のような美しい槍へと復元される。
そして摩理のバリアジャケットも漆黒のロングコートから、白い白衣を改造した摩理の元のバリアジャケットへと変化した。
「さて、みんなは下がっていて。ここからは私の力が尽きるか、あれの力が尽きるかの勝負になるから」
「何言いてるんや摩理！そんな無謀なことさせるわけにはいかんやろ！！」
「そうだよ摩理ちゃん！いくらなんでも一人だなんて…」
「私達も一度は死を覚悟し、主はやての為に捨て石になろうとした身だ。この場でお前一人行かせる訳にはいかない」
「騎士としても、お前一人行かせる訳にはいかない」
「そうだぜ摩理。私らだって、まだ戦える」
「バックアップは必要よね」
「負傷はしているが、まだ我が盾は砕けてはいない！」
「摩理一人で行かないで」
「そう言う事だよ摩理」
みんなの言葉に摩理は、嬉しくなるが、？ハンター？としての判断に従うのなら、摩理は同意するはけにはいかなかった。
これから摩理の行う戦闘は、周囲や仲間を気遣いながらできるような生易しい物では無い。壊すか、殺されるかのどちらかだ。
そんな戦闘にただでさえボロボロなはやて達を行かせる訳には…
「もう摩理！また一人で抱え込んじゃ駄目だよ！みんなもやる気があるんだから、手伝ってもらおうよ」

いつの間にか人間モードに戻っていたアリシアが、怒るように摩理を睨む。
摩理はアリシアの叱責に困った顔をする。
確かに一人で戦っても勝率は消して高くない。皆が参戦すれば勝率自体は上がるが、その分誰かが死ぬ可能性も高くなる。その事をアリシアが理解していないはずは無いのだが。
「……小さなフェイトちゃん！？」
はやての驚愕の声で改めて摩理は周囲を見る。全員が驚きで硬直している。
特にフェイト、アルフの驚きようは凄くまるで幽霊を見たように驚いている。
と、そこで摩理はようやく気付く。アリシアは死者だ。その死者が突然現れれば当然身内は驚くという事に今更気付いた。
「あ、そっか、みんなは？初めましてだね？私はアリシア・テスタロッサ。フェイトのお姉ちゃんです」
アリシアの突然の自己紹介に驚く、はやてと守護騎士達。だがフェイトは勿論、アルフ、なのはの驚きようはその比では無かった。
摩理の聞いた話によれば、フェイトはとアルフは勿論、なのはもアリシアが死者だと知っているらしい。
ならこの驚きも納得だ。
「……本当にアリシアなの？」
フェイトのどこか確認するような問いに、アリシアはどこか恥ずかしそうに答える。
「うん。そうだよ。えへへへ。フェイトとお話したいこと一杯あるけど今は、後でね。それより摩理！一人で戦う必要は無いよ」
「なら如何すればいいのかしら？」
「簡単だよ。夢の書の力を使えばいいよ」
「？夢の書の？確かに？ねね？さんの力を使えばみんなの怪我は治せるでしょうけど、失った魔力までは治せないわよ」
「それもあるけど、それだけじゃないよ。？摩理の力？も使うの！

！」
「？…私の力？どういう意味かしら」
「夢の書で摩理の力。？モルフォチョウ？をダウンロードするんだよ」
「！？…出来るの？そんな事」
『可能だよ。だって私には摩理の知識に残っている？虫？の力を再現する事が出る。なら摩理の？虫？を具現化できないはずが無いよ。だってあれは摩理の？夢？だから』
夢の書の説明を聞き摩理は思案する。？モルフォチョウ？をダウンロードできる。本来ならアリスを使う事が出来る摩理にとって、その事は重要ではない。
だが、このタイミングで夢の書とアリシアがわざわざ教えてくれたのだ。その事に意味が……
「ッ！？まさか…」
そこまで思考して摩理は気付く。あの？モルフォチョウ？はイレギュラーな？虫？だ。
本来宿主と、能力を使用する媒体以外に同化できないはずの同化型の虫でありながら、他人に取りついた？虫？
もし、この場にいる誰かに同化出来るのであれば、そしてあの？モルフォチョウ？が複数ダウンロードできるのであれば……
「聞いていいかしら？？モルフォチョウ？は複数ダウンロードできる？」
『残念だけど同じ？虫？を複数ダウンロードは出来ないよ。でも摩理は忘れてるの？あの？モルフォチョウ？は元々一匹だけど、同化すればそうじゃないでしょ？』
夢の書の言葉を聞き摩理は思い出す。摩理自身ほんの数回程度しか使った事が無い？モルフォチョウ？の能力。
それを応用すれば確かに、複数の人間が？モルフォチョウ？と同化出来るだろう。
摩理にしても初めての試み。そして当然同化を行った者もそれな

りの反動がある行為だが、今この状況で出来る唯一の勝つための最善な手段。
摩理は決意すると、同化出来る可能性のある三人に声をかける。
「はやて、なのは、フェイト。三人には凄く辛いお願いになるけど、お願い力を貸して」
摩理のお願いに、三人は笑顔で頷いた。

「反撃開始と行きたいけど、その前にみんなの怪我を治さないといけないわね。ちょっと待っていてね」
摩理の提案に、皆（特にシャマルが）怪訝な表情を浮かべる。
今回の戦いの前にそれぞれの得意な魔法や出来る魔法については教え合っていたが、摩理が習得している魔法の中に治癒魔法は無かったはずだ。
その事は摩理に魔法を教えたシャマルがよく知っている。
「夢の書！ダウンロード。？ねね。夜森　寧子？」
摩理の言葉と同時に、夢の書のページがめくられ、同時にアリシアの姿が消える。
驚くはやて達だが、そんなはやて達をよそに、摩理は声高らかに優しい歌を奏で始めた。
歌に合わせるように光り輝くキリギリスがはやて達の周りを駆け巡る。摩理の優しい歌とキリギリスの優しい光によって、はやて達の怪我がみるみる治っていく。
瀕死だったザフィーラも、外見では先程までの怪我が嘘のように治癒されていた。
シャマルをも上回る高位の治癒魔法に驚くはやて達。
「さてこれで準備はいいわね。夢の書！ダウンロード。？ハンター？花城摩理！！」
摩理の言葉と同時にキリギリスが消え、一匹の？モルフォチョウ

?が姿を現す。
自身が銀色の光を放ち、触覚が四本ある存在しない?虫?
その存在しない美しい?モルフォチョウ?に全員が見とれる中?モルフォチョウ?はゆっくりとはやての杖、シュベルトクロイツに止まる。
次の瞬間、?モルフォチョウ?は弾けるように触手へと変化すると、シュベルトクロイツに絡みつき、銀色の模様へと変化。さらにシュベルトクロイツから触手は伸び、はやての体に突き刺さり、一瞬ではやての全身に摩理の体に浮かぶ模様と同じ銀色の模様が浮かび上がる。
「……なんや、これ!?」
はやては驚愕の声を上げる。それは自身の身に起きた摩理と同じ現象に対してでは無い。はやてを驚愕させているのは、失った魔力が回復どころか明らかに強化されているのだ。
そして全身に浮かぶ銀色の模様を通じてはやては理解する。
これは摩理がアリスを使っている時と同じ状態であることを、そして摩理の強さが例えどんな事があっても、自分の願いを捨てない事だという事を。
「どうやら上手くいったようね。はやて、杖を振ってみて」
「……摩理。私、摩理に聞きたい事が出来た。後で話して欲しいんや」
「ええ。後で話すわ」
摩理の言葉にはやては納得すると、摩理の指示通りにシュベルトクロイツを振ってみる。
するとシュベルトクロイツから銀色の鱗粉が吹き荒れ、鱗粉がはやてと同化した?モルフォチョウ?へと変化。なのはのレイジングハート、フェイトのバルディッシュにとまると、はやての時同様に弾け、それぞれのデバイスに絡みつき銀色の模様へと変化し、さらになのはとフェイトの体にも模様が浮かび上がる。
それでなのはも、フェイトも理解する。

これが摩理の強さだと。
「さあ、準備はいいわね。これからあれを殲滅するわよ」
「「「うん」」」

「ディバインバスター！！・・・・・・あれ？」
なのはは自分の放った砲撃に驚きの声を上げた。
いつもの桜色の砲撃に、銀色の鱗粉が纏わりついている。
しかも着弾後の爆発範囲も圧倒的に広がっている上に、威力も信じられないほど強化されている。
疑問に思うなのはだが、他の二人を見て強化されているのがなのはだけでない事を知る。

フェイトは自分の出している速度に驚いていた。今のフェイトの出している速度は、フェイトの速さ重視のソニックフォームの数倍以上の速度を出している。
そ　れでもまだフェイトには余裕があった。
望めばもっと速くなるという確信がフェイトにはあった。
しかも、移動時に銀色の鱗粉がバルディッシュから溢れ、その鱗粉がクマムシを駆逐していく。
いける。その確信のままフェイトは速度を上げ、クマムシを駆逐し始める。

「デアボリック・エミッション！！」
先程までとは明らかに違う。圧倒的な範囲攻撃。そして、詠唱能力の強化。
はやては摩理の力によって強化された自身の力に改めて驚かされた。
「は～これは反則やろ。ま、相手が反則の塊や！私らが反則しても誰もく言わせへん！帰るんや、皆で！」

一度は絶望したはやては改めて呪文の詠唱を始める。絶望のクマムシを吹き飛ばし、みんなと一緒に帰る為に……

「みんな、がんばってるわね。これなら私も集中して出来るわ」
三人の攻勢を見ながら、摩理はアリスに魔力を込める。
三人の同化具合を見て、摩理がフォローする必要が無い事を判断した。
摩理はアリスに魔力を込めながら、ゆっくりとアリスを振るう。
アリスから漏れる銀色の鱗粉は、今までのように敵を滅ぼす為の鱗粉では無い。
穏やかに相手を眠りへと誘う、眠りの鱗粉。
鱗粉に触れたクマムシは少しずつ動きが鈍くなる。
動きが鈍くなったクマムシをはやて達が殲滅していく。
そうして、残ったのは暴走プログラム本体だけだった。
その暴走プログラムも、眠るように瞳を閉じ、穏やかな表情を浮かべている。
「摩理。それでどうするんや？」
「・・・・・これを本当の意味で終わらせるわ。この眠りは所詮紛い物。あの怨念も解放してあげるべきよ」
「うん。そうだね」
「分かったよ。摩理」
「せやな」
三人は思い切り、暴走プログラムから距離をとる。
摩理も地上に降り立ち、アリスを構える。
「全力全開！スターライト」
「雷光一閃！プラズマザンバー」
「響け終焉の笛！ラグナロク」
桜色、金、白の極大の魔力が頭上に見える中、摩理もアリスに鱗粉を集める。

やり方はすでになのはのそれを見て学んでいる。
ただ力を込めてがむしゃらに投擲するのではなく、集束し形を与える。
摩理のオリジナル魔法。
鱗粉はアリスに集束し、アリスを媒体に巨大な銀の槍へとなる。
「貫きなさい！シルバー」
四人の声が重なる。
「「「「ブレイカー」」」」
桜色、金、白、銀の極大の魔力が暴走プログラムを貫く。
深い眠りに堕ちていた暴走プログラムは、再生する事叶わず、極大の魔力の渦に飲み込まれ、完全に消滅した。
こうして闇の書と呼ばれる魔道書は完全にこの世から消滅した。

暴走プログラムの消滅を確認した摩理は、深々と溜息を吐きだした。
意識がもうろうとする。
正直立っているのも辛い。
今回の戦いは、正直限界ギリギリだった。一号指定の虫を四種類も使用し、摩理の？夢？は大分消耗した。その上、アリスの完全同化に、全力戦闘。
いくら強化しても、魔力も限界だった。
だから摩理は、みんなが無事な事を確認すると、笑みを浮かべながら、静かに夢のまどろみに身を委ねる事にした。

第十七話　怨念の終わり　　後編（後書き）

後編をお届けします。
正直今回の摩理の能力は反則ですかね。もちろん反動もある設定ですが、それでも反則なことには変わりないですね。
もしこのままストライカーズ編に突入したら・・・・・マッドな科学者さんとその娘達が瞬殺されそうです。
新人四人も地獄を見そうです・・・・
マッドさんの陣営に何か強化をしたいところですが・・・・・
正直摩理さんに対抗できそうな、お方に心当たりがいません。
まあ暫くは空白期を描くつもりなので、そこまで焦らず、何かアイディアが浮かぶ事を期待して・・・・・・

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7891u/

魔法少女リリカルなのは　　夢甦る銀槍

2012年1月2日02時46分発行